

いま、語りつぐ

平和への願い 特集号 (X)

# 「市民による戦争体験記録集」



平和の鐘



非核平和都市宣言文石碑

宝 塚 市

宝塚市教育委員会

いま、語りつぐ 平和への願い 特集号 (X)

「市民による戦争体験記録集」

## 発行にあたって

宝塚市は、平成元年（1989年）3月7日に「非核平和都市宣言」を行い、平成15年（2003年）9月19日には「宝塚市核兵器廃絶平和推進基本条例」を施行し、これらの理念、規定に基づき、戦争や核兵器のない平和な社会の実現を願って、市民とともに毎年様々な平和事業を進めてまいりました。

昨年は、「非核平和都市宣言」25周年を記念し、多くの市民のご寄附をいただき「平和の鐘」や「非核平和都市宣言文石碑」を末広中央公園に設置し、平和を願う強い思いを共有することができました。

今年、我が国は戦後70周年を迎えます。この間、幸いにも平和な社会が続いておりますが、戦後のこの平和が、未来永劫続くという保証はどこにもありません。今、生きている私たちが平和を守り、育て、語り継いでいかねばなりません。

しかし、先の戦争体験者の多くはご高齢となり、戦争の悲惨さ、平和の大切さ、命の尊さを語り継いでいくことはますます難しくなっております。

このため、宝塚市では「非核平和都市宣言」25周年記念事業の一環として、また平和啓発冊子発行が第10号になることを記念し、平和啓発冊子特集号「市民による戦争体験記録集」を作成することとし、原稿等を募集しましたところ、21名の方々から貴重で、心のこもった原稿等を寄せていただき、この度ようやく発行の運びとなりました。本当に感謝の気持ちに堪えません。

宝塚市の素晴らしい自然と明るく穏やかな暮らしは、市民の「宝」です。この「宝」を守り、未来ある子どもたちを二度とあの悲惨な戦火にまみえさせないように、「市民による戦争体験記録集」に寄稿されました戦争体験者の方々の生き証人としての心の叫びを、また平和への熱い思いを貴重なメッセージとして胸に刻み、いかなる困難があろうとも、二度と再び戦争を起こしてはならないことを誓い、後世に語り継いでまいります。

ご寄稿いただきました市民の皆様には衷心から敬意を表し、また厚くお礼申し上げますとともに、市民の皆様のますますのご健勝を心から祈念いたします。また、編集に携わっていただきました宝塚市平和事業検討委員会の皆様に対しましても深く感謝を申し上げます。

この記録集を一人でも多くの市民の皆様にお読みいただき、戦争の悲惨さ、平和の大切さ、命の尊さを次世代に語り継いでいただきたいと心から願っております。

平成27年（2015年）3月

宝塚市長 中川 智子

いま、語りつぐ 平和への願い 特集号 (X)

## 「市民による戦争体験記録集」

### 【 目 次 】

《 市民による戦争体験記録 》	(21名・50音順)
私の戦争体験記と宝塚海軍航空隊の予科練記	井上 正則 …… 1 頁
人生を変えた太平洋戦争体験	江口 忠治 …… 3 頁
川西航空機・宝塚製作所 爆撃被災	S・W …… 9 頁
私の八月六日	岡邊 好子 …… 13 頁
宝塚が永遠に平和で夢のある街でありますように	小川 碧 …… 15 頁
無題	川西 武信 …… 21 頁
戦争体験記	鞍本 恵美子 …… 23 頁
我が家と「戦争」	齋藤 一義 …… 27 頁
学徒勤労働員	阪本 治男 …… 33 頁
短歌 五首	塩江 昭子 …… 37 頁
語り継ぐ～運命を大きく変えた～「8月15日！」	菅波 英治 …… 39 頁
私の戦争体験	田邊 はる …… 43 頁

戦争はいやだ！～11歳の難民生活の回想～	西澤 慎	……	47 頁
戦争体験記	藤井 侑	……	53 頁
支那事変当時の夫の従軍写真	堀江 ヨシ子	…	57 頁
終戦 七十余年を刻みて	前澤 圭佐	……	59 頁
祖国愛に燃え 命知らずの少年時代	宮川 未治郎	…	61 頁
私の戦争体験記	室伏 尚美	……	67 頁
戦争体験記	八尾 幸次郎	…	71 頁
大阪大空襲	山岸 佐津子	…	75 頁
千の太陽よりも明るく	山根 政則	……	77 頁
《 用語説明 》		……	81 頁
《 宝塚市の戦争の記録 》		……	85 頁
《 宝塚市平和関連施策の主な取組経過 》		……	87 頁
《 編集委員編集後記 》		……	88 頁
《 非核平和都市宣言 》		……	90 頁

※ 本文中、\*印がついている用語は、巻末に用語説明があります。

※ 本文中、現在では使用しない用語がありますが、寄稿者の意思を尊重し、原文のまま掲載しています。

## 私の戦争体験記と宝塚海軍航空隊の予科練記

井上 正則

私は17才で海軍甲種飛行予科練習生（予科練<sup>※</sup>）に行き、早く零戦に乗り戦闘に参加し国のためにつくしたい思いで志願し、入隊し浦戸航空隊に入隊。当時は操縦、モールス信号、機関、気流、体力の向上等必要な教育、訓練を受けていましたが、南方戦線の敗北。沖縄に米軍の上陸等により、予科練の教育が不必要となり、予科練が20年6月に解体となり、各方面の国土に米軍にそなえ、迎え撃つ本土決戦にそなえ、要塞の構築作業等に鹿屋航空基地に派遣された。作業は基地より数kmはなれた山の中にトンネルを掘り、入口に砲台を作り、基地を占領された時に砲撃できる準備作業等を重点に、又基地内には飛行機の掩体壕<sup>※</sup>を作り、木製の飛行機を作ったり、対空機銃、模擬陣地に木の棒を黒くして、わら人形に軍服を着せ数多く作り、本当の機銃陣地は数少なく本当の対空戦闘は出来なく非常に悲しい作業であった。

基地に派遣され、到着したときは兵舎はなく、お寺、女学校に数日宿り、その後、分散して民家に分宿する状態で、6畳程の板の間、物置、納屋、牛小屋の二階等いろいろな場所での宿泊であった。

終戦（敗戦）になった事実を知ったのは8月20日の夜であった。以後実家に帰るまで苦しいいろいろの事態があった。

今年、宝塚歌劇祝100周年になります。が、昭和19年3月に海軍宝塚航空隊として接收<sup>※</sup>され、予科練の教育場になりました。創始者小林一三さんの遺訓である歌劇のモットーである「清く、正しく、美しく」は軍部に変えられ、予科練生の教育の場となる。その予科練生が20年8月2日に淡路島に防備陣地を作るため派遣隊とされ200名予定で先遣隊として100名が帆船住吉丸に乗って鳴門海峡でグラマンに急襲され14才～19才の予科練生82名が戦死しました。宝塚予科練の初の戦死者で、戻ってきた白木の箱を、花のみちで予科練生全員で出迎え、大劇場の舞台上で告别式が行われたそうです。歌劇の創設者である小林一三さんが、あまりにも若い命をなくしたと悲しい思いで阿那賀の丘に慈母観音像と戦死者全員の石碑に出身県名と氏名を記して建てられています。

予科練出身者でお参りしました時に、戦死者を漁師達が協力して浜に引き上げられた状況のお話しを聞いた内容は、言葉に出ない悲壮で言葉に出ない涙一パイで聞かせていただきました。この様なことは生涯忘れることができません。

当時宝塚大劇場は閉鎖され、生徒は慰問公演、又は女子挺身隊<sup>※</sup>員として軍需工場等に勤務していたようです。

69回目終戦記念日の天皇陛下のお言葉。  
戦争の惨禍が再び繰り返されないことを切に願い（中略）世界の平和と我が国のいっそうの発展を祈ります。

「平和の尊さを味わい次世代に伝え二度と繰り返してはならないと全国民が実行せねばならない」

宝塚聖天「護国英霊」第一回慰霊祭を昭和53年6月25日に行い、平成19年5月13日に第30回（最終）慰霊祭に予科練生が出席していました。

海軍予科練の各種特別攻撃隊を記します。

- 1、特攻と名付け、戦闘機と爆薬を抱かせて敵艦に体当たり
- 2、回天 魚雷に人間が乗り、敵艦に体当たり
- 3、桜花 グライダー式（ロケット）有人爆弾
- 4、震洋 ベニア板（1人乗り）のモーターボートの船首に爆薬をつけ、敵艦に体当たり
- 5、伏竜 潜水服に酸素ボンベで海中にもぐり、上陸用船に棒爆薬を当てる

以上のように特攻兵器も弱体化して、本土への米軍の上陸にそなえていた。

陸、海軍を合わせて特攻による戦死者は9,600人と戦史叢書に記してある。

特攻隊員2,060名の遺書が残されている。



## 人生を変えた太平洋戦争体験

江口 忠治

昭和6年4月10日生まれの私、満州事変<sup>\*</sup>が同年。

昭和12年7月7日、日支事変<sup>\*</sup>からおぼろげながら覚えている事があります。

昭和13年、父のすぐ下の弟が、支那戦線で戦死。昭和16年12月8日、ラジオ放送、軍艦マーチがけたたましく、大本営<sup>\*</sup>発表「本8日未明我が帝国陸海軍は米英と戦闘状態に入れり」と。真珠湾奇襲攻撃の戦果は翌日の新聞に載りましたが、野村・来栖両大使が戦争回避に交渉されていた。

又、御前会議<sup>\*</sup>で昭和天皇も長びく日支戦争<sup>\*</sup>で、国力が落ちているので、米英相手に諦める様におっしゃったと聞きましたが、ヨーロッパでもドイツがロシアを相手に戦争。日本、ドイツ、イタリーと三国同盟<sup>\*</sup>を結んだが、当時の内閣総理大臣の東条英機が陸軍大臣を兼ねており、強引に戦争に向ってしまい、我々は益々軍国少年の教育に変わり、戦線が広くなり、青年は赤紙<sup>\*</sup>1枚で応召され、又、志願して兵隊に。

資源の乏しい我が国は石油をめざしてインドネシアまで戦争は拡大して行き、戦果があった時はニュース放送での大本営発表も活発に放送され、国民は喝采<sup>かつさい</sup>でしたが、苦戦も国民に聞こえて来た。

食糧配給1人1日2<sup>つ</sup>合<sup>く</sup>3<sup>く</sup>勺、米穀通帳<sup>\*</sup>、衣料品も切符制になり、昭和18年になると空襲で米機が来襲。各家庭では防空壕に避難訓練や、徐々に食料も不足。

軍隊も今まで、20才で兵隊検査で甲種合格した青年は強制的に軍隊に。それが乙種の人も次々に召集令状<sup>\*</sup>（赤紙1枚）で軍隊に。私達子供も軍国少年の教育で、私は4人兄弟の末っ子でしたが、次姉が18年9月に病死、兄は19年に召集で高知の連隊（本籍のある県の連隊へ入隊）。長姉は子供2人連れて義兄の本籍石川県に疎開<sup>\*</sup>。

昭和19年3月に小学校（国民学校<sup>\*</sup>に名称変更）当時は旧制中学校<sup>\*</sup>に進めない者は高等科2年（義務教育でなかった）。旧中学も学区制があり、（私は大阪府中河内郡三野郷村）府立八尾中学、十七中学（現布施高校）、城東工業、航空工業（現布施工科学校）など当時、旧中学校は府内17校しかなかった。

義伯父が、飛行機の時代やから航空工業を受験する様にすすめられ、私の小学校から3名受験3人共合格。5年6年生の担任の先生は、君は体が細いから八尾中にしろと云われましたが、3名共同じ事云われた様で、合格報告に行くと先生は大層喜ばれました。

試験の中で自分の府立校に入学したのは18名（小学校男子組63名のうち）私立に7名（明星、城東商、大倉等）。女子は高等女学校<sup>\*</sup>等へ。（小学校女子組は45名）

尊敬する人を作文に書く。5・6年生担任の先生は松下村塾と吉田松陰先生を尊敬しておられ、徹底して国史の時間に教わったお陰で、すらすらと作文出来ました。体育は懸垂が15回、腕立て伏せ15回以上、広い運動場を3周（グライダーを機体科で製作して



いましたので、地上滑走する時に運動場を広くする必要があった)。

月に1回は軍隊の配属将校が(若い少尉)全校生徒の行進軍事教育。それ以外は2年生以上5年生まで学徒動員<sup>※</sup>で、軍需工場で仕事。

私達1年は学校の留守を<sup>まも</sup>るが、午前中は機械の実習工場で旋盤で軍需工場から廻って来た仕事。黒パン2個の配給、大阪市内から通学している友達に分けてあげたり、週に1回は学食でカレーの配給。これも友達に分けてあげた。或る日、駄菓子屋をしている家庭の友が、甘納豆が入ったからと云うので、甘い物に飢えているから全員何銭かを渡し、翌日愉しみに、小さな袋(新聞紙で作った)を開けて口にして、全員が「あっ」と云いました。味もない湯搔いたもので、甘味を愉しみにしていたのに本人も知らず、我々に甘いものを食べさせようと、好意だったのがっかりした事。家庭でも砂糖は貴重なものでした。

秋の稲刈りも農家は人手が足りなく、私達が手伝いに動員されて、昼食白ごはんの握り飯をふるまってもらって腹一杯になり大喜び。帰りに又おにぎりを戴いて帰った思い出。農家も男子が応召で人手不足だった。その頃から敵機の空襲が頻繁になり、或る日空襲までに警戒警報で帰宅する様になり、私は自転車通学だったので急いで帰路に(学校は近鉄八戸ノ里)。東に向って急いでいる時、生駒山の方から艦載機(グラマン)が向って来るのが見え、危険を感じたので自転車をほうり投げ、道路から下のたんぼに<sup>は</sup>這いつくばった途端、ダダダダダと機銃掃射。上を見上げたら、操縦してる米兵が見え、助かったと思いましたが、警戒警報がなる前は友軍機が警戒しているが、空襲警報になると何処に行ったか、おらん様になり、爆撃機が3機位編隊で来て、下から高射砲<sup>※</sup>を撃てども敵機の下で煙が破裂するだけで敵機は悠々と飛行して行く。

その頃南方海上ではミッドウェー海戦で連合艦隊が作戦の失敗で敗戦し、国内では学童疎開(小学生が親元離れ、都会の生徒は田舎の方へ。私も親父の里、高知県中村に疎開するかと云われ、昭和20年正月に父が、土佐久礼までの切符を大阪駅に勤めていた人から買ってもらって、切符1枚と幾らかの金を渡され、まだ一度も行った事もない汽車、又、宇高連絡船で四国高松へ。土讃線で土佐久礼駅まで行きバスで4時間揺られ中村へ。それから又、バスを乗り継ぎ父の実家へ。

小学校1年生のとき、祖父と伯父が、父の弟の戦死で靖国神社に招待された帰り、河内の我家に寄った時一度逢ったきりで、父の実家は初めて。鍋島と云う部落でバスを降りてびっくり。江口と云っても村の半分は江口姓の村。やっと尋ねあて、翌日、旧中村中学に転校手続きに、ここも尋ね歩いて学校に行き、無事手続きが済み、翌日長時間バスは、と思っていると、土佐清水から高知までの沿岸船に四万十川河口から乗船。客船と云えども300t~400t。太平洋の荒波に揉まれ一晩中柱を持って、船酔いで高知港へ。

兄が高知の連隊におり、初めて高知市電の朝倉駅で高知の連隊の兄と面会。兄の云う城南館で宿泊。翌日高知駅へ行き大阪迄の切符を買おうとしたら、憲兵が100km以上の乗車券は証明書があっても売らんとはねつけられ、翌日も翌々日も駄目。旅館は最初に預けた米がなくなったので泊められんと云うので、仕方なく父の実家に戻り、再び米を持って

今度はバスで土佐久礼駅に行き、証明書を見せると駅長がもう学校が始まっとるやないかと、すぐ大阪迄の乗車券を売ってくれ、トンネルの多い（103個）汽車に揺られて、讃岐財田まで来ると、車内放送で姫路以東の方は連絡船に乗船できませんと云われたが、何とかなるわと高松駅へ。最後の船は出た後だったので北風が吹き抜ける待ち合い室で夜明かしし、翌日大人の横にかくれて乗船。宇野駅で汽車に乗り替え姫路駅まで来ると全員降ろされ、大阪まで歩く覚悟で人の後について行くと、山陽電車の駅。聞けば神戸まで行けると云ってもらい、電車で帰り着く事が出来た。中学1年生の冒険な一人旅でした。

それからは空襲がひどくなり、神戸が最初だと思うが、3月の初め、河内から西空を見ると赤くぼーっと夕焼けの様に見えた。3月12日家財道具一式馬力<sup>ばりき</sup>※に積んで、大叔父の持ち船（機帆船）に26戸分の疎開する家族を積んで、13日昼出港する予定が1軒が遅れた為に3月13日の空襲で焼夷弾<sup>しょういだん</sup>※の爆撃（大阪大空襲）で大正区の尻無川に藻屑<sup>もくず</sup>となってしまう。

最初は私だけが疎開するつもりが、親父がこわがりと一緒にと云う事で、田舎で家業の散髪屋さんをするつもりだったらしいが、着のみ着のままの状態に疎開。戦災者と云う事で紙のフトンが配られたが、ガサガサとして寝られたものではなかった。4月に入り、履き物もなく、藁草履で砂利道片道7kmを歩いて通学した。

早速帰る途中、1年先輩5名が待ち伏せして「大阪弁を使え」と毎日1年間続いた。考えて見れば下田町小学校から中学へ進学した同級生は3人しかいなかったもので、疎開者とすぐわかったのでしょう。又1人大阪市堀江から疎開（高津中学）した同級生は大方町（今の黒瀬町）で、お母さんの郷<sup>きと</sup>だったらしく、近所で息子に食べさすさつま芋を買いに行ったら「おまんく」の息子に食べさす芋はない、牛に食わさないかんけん<sup>かんけん</sup>と断られ、やっと手に入れた芋を昼の弁当に持参すると悪5人組にとりあげられたと話してくれた。

その友は3月13日空襲の時、防火用水の中に入って助かったと云っていたが、いつも同窓会ではその話題で花が咲くが、その友も一昨年亡くなり、葬儀の時にいじめの頭<sup>かしら</sup>やっただ奴と話したら、「そんな事あったかな」ととぼける。友の葬儀でなかったら喧嘩になっているところやっただと思うが、やられた方はいつまでも根に持つがやっただ方は忘れたふりをするか、とぼける。

今各地で中学生のいじめが問題になっていますが、標的にされる子供は親しい友達を持たないから、攻撃しやすいのだろうか。それともそんな年頃か。又、小学校から中学生になる時に2つ3つの小学校から1校になるからでないかと思われる。

昭和20年8月7日朝登校時、広島にとてつもない爆弾が落ちたらしいと話していた事を思い出す。続いて長崎にも同じ爆弾らしいと云っているうちに、8月15日、今日、天皇陛下の大事な放送があると。運動場で途切れ途切れに聞こえる敗戦の詔勅<sup>しやうちよく</sup>※、戦争に負けた。

大阪におる時は、上級生が毎日の様に予科練<sup>よこけん</sup>※に入隊するのを見送った先輩達が学校に復帰。悪童を呼び出し、バットで尻を叩かれたり、色んな事でしごかれた。勉強もノートも

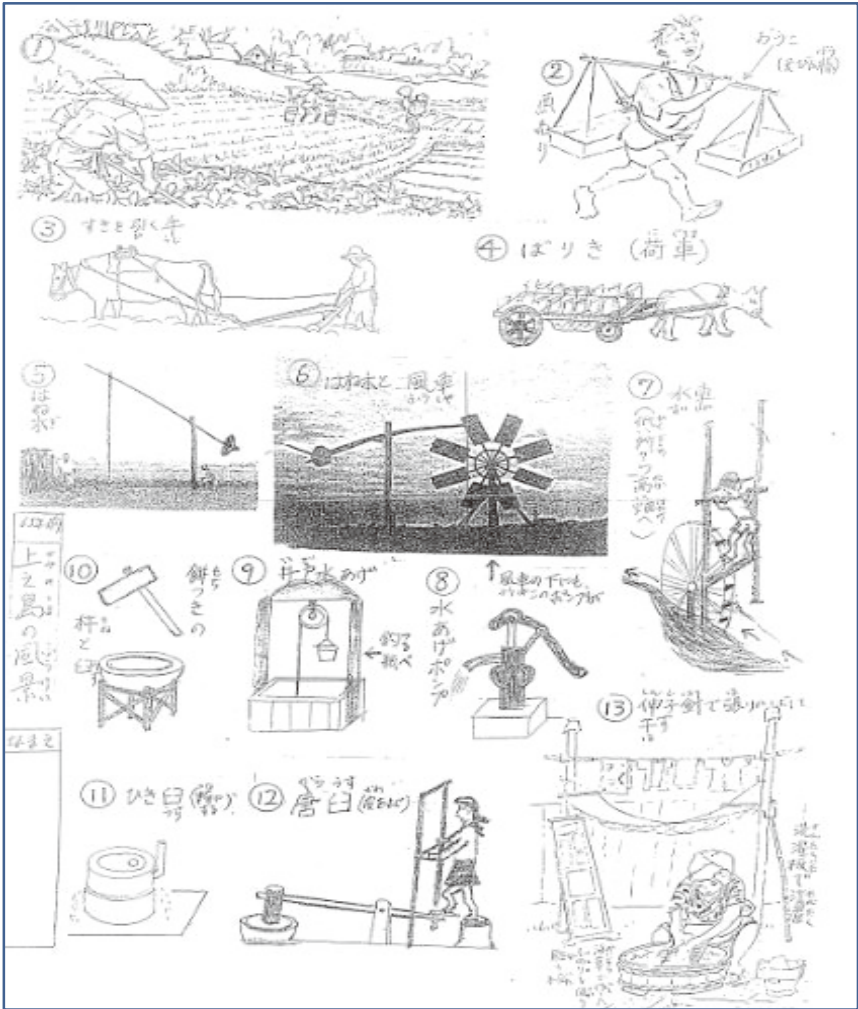
教材もない。幸い8年先輩で頭のよい方がおられ、ノートの使いさしと、家庭教師の代役をしていただいたが、いじめがエスカレートして来て、3年生になった時不登校になって、半月程休んだが、担任の先生が迎えに何度か来て戴いた。

ただ私が疎開して田舎に帰る事を、西川君に伝えてなかったのが、空襲で死んだのではと探してくれた事。60年振りに小学校の同窓会で顔を合わせ、ずっと消息がわからず再会した時に大喜びしてくれたが、私が伝えてなかった四万十川の田舎に行った事、心苦しく、友情深く悩んだ。私の人生は6年間の田舎暮らしと、得たものは色々あるが、上阪して63年のうち、40年は宝塚生活。阪神淡路大震災で終の住処<sup>ついで すみか</sup>と買ったマンションが半壊。一生涯が、一生貧乏した人生でした。

疎開したのは昭和20年3月でしたが、住む場所がなく、お隣の農機具小屋を借りて、荒蕪<sup>むしろ</sup>で豊はなしの暮らし。父が三男だったので、田畑の一坪ももらえず、山の崖を唐鋏<sup>くわ</sup>で開墾し、秋に収穫した芋は卵大。苦勞して作ったのはこれかいなど。他の農家には山盛り、収穫して積んであるのに。

収入がないので、春には四万十川の青苔、あおさ取り、冬は海岸の岩場で塩炊き（大豆とぶつぶつ交換）。父は大の酒好き。各家庭で芋焼酎を作り、今日はあの家、明日はこの家（父の子供の頃の友達）でしぼる（密造）。一番出ばなは、マッチをすれば火がつく焼酎。「これはええのが出来ちよる。」と土佐弁で云って、毎日飲み、昭和23年3月に血を洗面器に吐いて死に、私と母は堤防の土方仕事。人生がすっかり変わって、建設省の河川工事事務所の機械工場<sup>くわ</sup>で修理見習いに。なかなか本採用の辞令がもらえず、日当1円。そんな時に日亜製鋼（現日新製鋼）の地方採用の募集で、尼崎に来たら肺にくもりがあると不採用で、同時に建設省は本採用となった。人の運命は何処で変わるかわからないものです。

昭和22年には新円と旧円が封鎖され、1人200円しかもらえなかった。今までの貯金はパーになった事をご存じでないと思います。



上記イラスト 江口さん提供





## 川西航空機・宝塚製作所 爆撃被災

S・W

《本原稿は、平成20年11月に103歳で逝去した親父が私たち子どもに書き遺した私文書、所謂『自伝』等の川西航空機での被災の部分ですが、今回（原則：原文で）敢て公開するものです。平成2年（1990）脱稿：親父85歳。逝去直前の約5ヶ月間は脳梗塞で入院したが、それまでは、所謂、ボケもなく頭脳は大変明晰であったので、余りにも間違っている事は書いていない筈である。》

（昭和15年4月、大陸[日中戦争\*]より帰還。その後、昭和16年12月7日大阪より宝塚に転居。開戦の前日）

私が川西航空機宝塚製作所に徴用\*されたのは、昭和17年（満36歳）である。寮職員として200名余りを預かり（職員3名）宿直も多かったので、殆ど3食給食、その為、家の食事は何とか遣り繰り出来ていた様である。

会社の給食とは云え、米半分・丸大豆半分と云う物であった。育ち盛りの、娘・息子が一番被害に逢ったことであろう。

戦争末期、昭和20年（1945）7月24日朝7時40分頃（当日宿直）『B29重爆撃機』10機編隊（艦載機も多数飛来があった。B29の機数は不詳）が2波にわたり宝塚製作所を空爆し、広大な工場群は（現在の阪神競馬場・新明和工業等）瞬時にして瓦礫の山と化した。南北50余棟の独身寮は焼かれ、又、屋根は吹き飛ばされ完全な物は無かった。

当日朝7時半頃、寮生を工場に送り出した直後の空襲で、寮内に居た病人3人を連れて防空壕に避難した直後、至近弾を受け（1寮・5棟・棟間に防空壕あり）寮は倒れ生き埋めになり、砂煙の中、微かな外部からの光を頼りに穴を掘り上げ這い出し、次の壕に移る途中、第2波の爆撃で両脇に寮生を抱えたまま、爆風で3位飛ばされ叩き付けられたが、九死に一生を得た。

〇〇と云う15歳の寮生が工場鹿塩門付近で爆死した。四国の子供であった。（当時、阪急電車・今津線の仁川駅と小林駅の間に、鹿塩駅が設けられており、製作所への至近距離の駅であった。）

後日、両親が遺骨と荷物を取りに来て、事情を聴かれて泣かれて困った。可哀相でならなかった。

私の居た寮の道路一つ隔てた東側の女子寮（15・6歳の女子挺身隊\*）が直撃を受けた。（此処も1寮5棟間に防空壕有り）寮は倒れ、壕は崩れ砂に埋もれ、手の付け様もなかった。此の寮には遅番の寮生が何人か残って居る筈である。

崩れた壕の上に立つと微かに助けを求める声が聞こえたので、落ちていた洗面器で夢中で掘り返すと小さな隙間に頭が見えたが、崩れた木材に挟まれ一人では手に余り応援を得

て引き出したが、救護所に行く途中で死んだと聞いた。

可哀相な事をした。又その奥に8名が、寮母に抱かれる様に折り重なって、窒息死していた。

これも収容した。又焼けた寮の押入れの中から、焼け爛れた寮母3名を収容した。悲惨の極みである。

爆風で飛ばされた屋根の無い体育館の土間に、<sup>むしろ</sup>を敷いて死体を並べた。工場からも次々運び込まれて来る。7月の酷暑で、夕方には死臭が立ち込めて、近づけなかった。

此の事を予期していたのか、木工工場には組み立てるばかりにした棺が準備してあったが、とても足りなかった。

翌日、工場南端（仁川堤防下）に長い壕を掘り、崩れた工場廃材を集め、柱を横に渡し積み上げ死体を大八車で何度も運んだ。棺の無い者は毛布に巻いて廃材の上に乗せ、機械油を掛け茶毘に付した。二昼夜黒煙が空に漂い、悲惨の一語に尽きる。

【此の時、小生は4歳を少し超えた時であった。当時一家は宝塚南口に居住していたが、大空襲で空が真っ黒になり、煙を通し太陽が赤く輝いていた。長じて、小学校時代、日食の時、(当時は)煤ガラスを通して見る太陽そのものであった事を思い出した。戦時中宝塚大劇場が接收<sup>す</sup>され、現在の宝塚音楽学校の場所に多数の予科練<sup>び</sup>が居た。その様なことで、小宅でも、何人かの兵隊さんの宿舎としてお世話をしていた。ある日、若い兵隊さんが休暇で神戸の自宅に戻っておられた時、空襲警報が出て、電車が動かず、帰営時刻に戻れなくなり、帰営後、大変な懲罰で、小宅で「坊や、痛いヨー・痛いヨー」と泣き叫んでおられた事を思い出す。(このような制裁の事は、新藤兼人さんの映画「陸に上った軍艦」の映像に出ている。)又、何時の時か、二階縁側の屋根に機関銃の弾が突き刺さっており、警察官か軍人かが来て、調べて持ち帰った事が有った。川西航空機の工場が有り、宝塚大劇場が接收されていた村であり、戦闘地域ではないが、民家の屋根に機関銃の弾が突き刺さっていても、不思議でない時代である。それが戦争と云うものであろう。

終戦直後(宝塚南口駅近く)亥の谷川から支多々川までの武庫川沿いの住宅全部が接收されアメリカ兵(進駐軍<sup>す</sup>)の住宅になった。接收解除は昭和27年の、サンフランシスコ平和条約<sup>す</sup>発効後のこと(?)。幸い、小宅は道を挟んで、西側だったので、接收は免れた。その他、戦時中の事を含め、多数の記憶は断片的であるが、今でも色々と思い出す。

怖かった、食い物の無い時代であった。3歳～5歳時の記憶が今も鮮明で、忘れられない。 編者 記】

**惨状は、戦地も銃後も無い。**

**何故この様な子供まで、犠牲にしなければならないのか。**

**ただ、戦争の虚しさだけが残る。**

5日後、西宮市の山手にある療養所から、入院していた寮生が死亡し引き取りに来る様、連絡があった。(長期入院で、寮に籍が有るだけで、顔を見た事は無かった。)

三人で、大八車を引いて西宮市の療養所に行った。棺は無し、布団で巻いて大八車に乗せ



た。食べる物とて無し、フラフラになって夕方帰りついた。翌日までおく事も出来ず、廃材を集め火葬に掛かったが、簡単なことではなかった。布団が燃えず、死体に火が届かない。あれこれしてるうちに、首だけコロリと落ち、大変な事態になり、近くの、疎開して留守屋敷の板垣を壊して燃やし、明け方なんとか骨を拾う事が出来た。

【戦時だから、留守屋敷の板垣を壊すことが許された[?]のだと思う。 編者 記】

戦災で何も無い中、野天火葬しかなく、薪を積み、死体を載せ薪が燃え切れれば<sup>かぶ</sup>糞殻を被せ一晩すれば翌朝完全に骨になると聞いてはいたけれど、糞殻は無い。一晩中空腹を抱え、火葬をやらされた。

人間一生の内、この様な体験は、数多くは有るまい。

九州の子供であったと思う。実家に通知したけれども交通事情も悪く、<sup>つい</sup>終に遺骨を引き取りに来なかった。親の気持ちを考えると、<sup>や</sup>遣り切れない思いであった。近くのお寺で遺骨を預かって貰った。

《上記、近くのお寺：私が中国・新郷（シンキョウ。中国北部河北省の都市）<sup>へいたん</sup>兵站\*司令部に居た時、<住職は、従軍僧として北支に来ていた。（私は昭和12年9月から、昭和15年3月末まで、日中戦争\*に参戦。当時、中国は支那。日支事変\*と呼ばれていた。その為、中国北部は北部支那で、北支。当時は通信手段が大変貧弱で有ったので、馬による連絡が多かった。私は騎兵として参戦していた。）> 兵庫県から従軍僧が来ていると聞いて、宿舎を訪ねた。住所を聞いたら良元村だと云うので、伊子志の〇〇【お袋の叔父 編者 記】を知らないかと聞いたところ、南口の〇〇さんならよく知っているとの事で、夜遅くまで話しこんだ。

東蔵人のお寺の住職であった。【僧は、現 高司の西南寺 有井正随 師】 》

その様な事があって、快く預かって頂いた。（遺骨のその後の対応は、分らない。）

8月15日終戦、工場は閉鎖され、全員が解散となった。（徴用であるので解雇ではない。）

（現在公表されている印刷物によると、当時の人的被害、会社では、死者：83名・重傷者：39名。

近隣の被害、死者：23名、重傷者：8名、民家の全壊：205棟・半壊：244棟との事。

戦時の数字の為、どこまで正確か？）

了

文章だけは淡々と書いているが、戦地ではないのに、内容は「悲惨」この上ないことです。親父は「戦争は絶対してはならない」と、云うでしょう。自伝には沢山の事が記載されていますが、大陸における戦争のさまなど総てを書けば、紙幅が足りません。

その後川西航空機の後身の会社に縁あって、73歳まで勤務したが、戦争とは関係ないので、削除してあります。

【それなりのお齢の方は、此処に書かれている文言等のご理解頂けると思われますが、若い方にはご理解頂けない文言があると思います。《例：徴用・予科練・兵站・女子挺身隊・接収・進駐軍・サンフランシス

コ平和条約 等など》掲載スペースの関係で、解説を書けません。是非、辞書を片手にお読み頂ければ、お分かり頂けるものと思います。

编者（親父の次男・73歳）記 以上】



川西航空機宝塚製作所 被爆状況

## 私の八月六日

岡邊 好子

戦時中父は軍需物資調達商、長女は父の会社、次女は警察署勤務、三女私は広島女学院の四年生、夏休みの学徒動員<sup>\*</sup>として鉄道局へ、四女妹は岡山に疎開<sup>\*</sup>していました。丁度八月六日の前日、従姉妹達五人で帰広したばかりでした。八月六日あの朝、異常な破裂音と共に家の下敷となり、一瞬私の家に直撃弾が落されたと思いました。原爆の炸裂と同時に中心地域が一斉に火を吹き、つぶれた建物のある所から火の手が上がりました。

爆心地から一・三キロ離れた建物作業場から大火傷で母がやっと帰って参りました。足は打撲、髪はちりちり、口は腫れるだけ腫れています。「お母さん」と言ったきり声も出ませんでした。目の前は火の海です。次姉と二人で妹の傷をフトンの包布で縛り、便所の戸に母を乗せて三日三晩歩いてやっと私達の町内の避難場所、中深川小学校にたどりつきました。重症 中症 軽症と教室全部別れて避難した人達で一杯でした。父と姉はどこにいるのかと案じていましたが重症の中に二人共虫の息で初めて涙の対面を致しました。父は頭から背中全部大火傷し俯せたままの姿勢、姉も顔から体、両手大火傷、父母姉三人共今日か明日かと死線をさまよっていました。ヤケドには蛆<sup>うじ</sup>がわきました。田の青草を取りにいき青草汁をつけたり、ジャガ芋を噛みその汁をヤケドにつける事が日課でした。ある日父を背負ってトイレにいくとトイレの中で座ったまま死んでいる人を見て次姉が卒倒した事もありました。

何の薬もなくただ「赤チン<sup>\*</sup>」だけの治療です。表面が乾き内は膿<sup>うみ</sup>んだままです。救護班の方が父の背中を治療してくれましたが、それから高熱が続き、八月十五日の終戦を耳にしながら、母の事、姉の事、私達の事を謔言<sup>うわごと</sup>のように言って、八月十八日に亡くなりました。母と姉は父を見送る事も出来ず唯目を閉じて涙しているだけでした。畑の中に古材を井桁<sup>いげた</sup>に積み、その上に父を安置し次姉と二人で火をつけました。今でも思い出すと涙がこぼれます。小さくなった父と重症の母姉と、何もない田舎の小学校で二十日余りを過ごしました。食べる物もなく、鍋のコゲを水で薄めて炊いたおもゆとも言えないものまでも取り合いの喧嘩を何度も見ました。そしてお腹一杯ジャガ芋や南京を食べたいと思いました。それは今でも私の悲しい思い出の好物です。お風呂にも入れないので、頭からパンツのゴムの中まで蚤<sup>のみ</sup>が張りつき、夜次姉と二人交替で池に飛び込みました。

父の被爆場所は爆心地から一・三キロの五師団司令部の中にいました。重症の二人は三十キロの道をどうして来たのか、どんなにか苦しく、死に物狂いで避難場所まで来たのだと思います。姉は一度は死んだ人達と一緒に火葬場近くまで運ばれていたそうです。「まだ私生きています」とやっと言ったそうです。建物疎開地へ勤労奉仕の中学生、肉親を求めて探し合う人々、死んでいる母親の乳房を吸っている赤ちゃん、道路も橋の上も川の中は焼け爛れ男女の区別すら出来ない死人の山です。「水をください」と水を求める呻<sup>うめ</sup>き声、

そこは修羅場であり、地獄でした。

妹と一緒に帰広した従姉妹達四人は全員即死でした。こんな悲劇が二度と繰り返されていいものでしょうか。資料館西へ、県立第二中学校一年生は家屋疎開作業で三百四十人が全滅、資料館南へ元安川沿いに市立高女一年生二年生五百四十人、当日学徒動員八千余名中六千余名が爆心地で被爆しました。爆風で倒れた建物の中で火災がなければ火傷だけで助かっていた筈です。無数の人が猛火の中で焼死したこの現実は忘れようにも忘れられません。戦争を知らない子供達に平和の尊さを知ってもらいたい、戦争の悲劇を忘れないでほしいと願わずにはられません。奇跡的に生き残った私達は一日としてあの日の惨状を忘れることはありません。

私は後残り少ない年月を、核兵器の悲惨さ、残酷さを経験した事のない人達に、平和と命の大切さを伝え続け、精一杯生きて参りたいと思っています。

## 宝塚が永遠に平和で夢のある街でありますように

小川 碧

私は宝塚市の仁川小学校に、昭和43年に新任として勤め始め、6年目に初めて3年生を担当しました。郷土読本「宝塚のくらし」を教えていて、空襲の「く」も出てこない事が不思議でした。祖母から神戸大空襲の話を聞いて育ったからです。11年目にまた3年生担任となり、「宝塚に空襲はなかったのか?」と思い始めました。なぜなら、長女がすでに3年生になり、「西宮のくらし」には西宮空襲のことが載せてあり、えべっさんの鳥居だけ残った写真まで載せてあったからです。

そしてこの謎は次の転勤校、末成小学校で解けました。教師になって15年目、初めて聞いた宝塚空襲の悲惨さ! 地域の方から「校内研修会」で、教えていただいたものです。

これは子ども達に教えなくては! ということで、教材化して、次の3年生担任の時、また、6年生の歴史学習には間に合ったというわけです。

- 宝塚の子ども達に「宝塚にも空襲があった」どんな街も戦争になれば捲き込まれてしまう。
- 軍需工場がなければ空襲されなかったかもしれない。
- 文化の香り高い豊かな宝塚のくらしを続けるのは、平和あってこそ!

宝塚の教育研究集会で発表したことがありますので、この教材を使って何校かでは教えてくださっている様です。

よろしく申し上げます。

## 宝塚にも空しゅうがあった！

[はじめに]

今から、お話するのは、東くらんどほいくえんの、さか本えん長さんから、聞いたお話です。さか本先生は、宝塚で空しゅうを受けた川西こう空きせい作所につとめておられた方です。せんそうの時、宝塚にもこんなことがあったことを知ってほしくてお話ししてくださいました。

[田んぼだった所に・・・]

下の地図を見てごらん。川西こう空きせい作所は、今の競馬場の所にあったんだよ。



いや、今の競馬場より、もっともっと広がったんだ。そして、今の住友化学や、大同さんその会社のあたりや、福井町、御所の前町なども、川西こう空きにつとめる人の社宅（しゃたく）だったんだよ。

でも、このあたりは、ずっと前から、そうだったのではなくて、もともとは、一面見わたすかぎりの田んぼで、それも、おとなりの西宮のお酒を作る良いお米がとれるゆたかな土地だったんだよ。

[土地をとりあげて・・・]

では、どうして、そんな田んぼが、こう空きのせい作所になったかというね。それは、せんそうがあったからなんだよ。

昭和16年に、日本は、アメリカとのせんそうをはじめたんだが、せんそうをするためには、ひこうきがいるだろう。そのひこうきをつくる工場がひつようなので、川せいふが、お百しょうさんから、むりやり、田んぼを買い取って、工場をつくったんだ。

お百しょうさんの中には、「そんなことはいやだ」と言って、反対した人もいたよ。する



と[2]けんぺいたいが来て、けいさつにつれて行き、ひどい[3]ごうもんをして、むりに、田んぼを売するのにさんせいさせたりしたものさ。

また、田んぼ[4]一つぼにつき12円で買い取ったのだが、あるお百しょうさんが、「13円で買ってほしい」というと、「おまえは、せんそうにきょう力しないのか！[5]ひ国みんだ！」と言われ、むりやり12円で買い上げられてしまったんだよ。

そして、小仁川のていぼうの砂を使って、田んぼのみぞや、水ろを2ヶ月でうめたててしまったのだが、この工事には、[6]朝せんからつれてこられた人が、昼も夜も働かされたりしたんだよ。

#### [工場の仕事]

そして、できた工場のまん中には、中おう道路があり、阪急電車の「鹿塩」(かしお)の駅とつながっていたんだ。「鹿塩」(かしお)という駅は、今はもうないけど、ちょうど、「仁川駅」と「小林駅」のまん中へんあたりで、今のくま野神社の北に、ふみきりがのこっているだろう。これは、工場につとめる人が、近いように、りん時につくったものなんだよ。

さて、工場の中には、工作台が、4万台もあり、4万人ぐらいの人が、一日12時間も働いていたんだ。昼と夜の二交代いせいで、なかには、12時間ずっと立ちっぱなしの仕事もあったそうで、事故も多かったそうだよ。

昭和16年、日本は、アメリカの[7]しんじゅわんにこうげきをかけ、それまでの中国とのせんそうから、アメリカやイギリスとも、せんそうを始めることになってしまったんだ。

わかい男の人は、どんどんへいたいになっていき、軍(ぐん)からは、どんどん、ひこうきをつくるようにいわれたんだ。

昭和18年になると、へいたいに行く人がふえ、工場で働く人がへってきたので、学校に通っている生とまで、「ていしんたい」といって工場では働かせたんだ。宝塚歌げきの生とたちや、関西学院(かんせいがくいん)の学生たちや、西宮の高等女学校(こうとうじょがっこう)の生とたちも工場で働いたんだよ。三田やさき山あたりからも生とが来たし、遠いところでは、和歌山(わかやま)や奈良(なら)の天理の女学校や、岡山(おかやま)や、京都二中の生とまで来て、働かされたんだ。

仕事をきちんとやっているかどうか、海軍こう空たいの見回りがあって、なまけていたり、失敗すると、そのはん全員がせきにんをとらされたんだよ。このように、学生やふつうの人を工場で働かせることを「ちょう用」というんだよ。

せんそうがはげしくなると、昼間、お店をしている人も、夜、工場で働かされたから、お昼のつかれが出て、つい、いねむりをして、見回りにほつぺたをたたかれたりしたものだよ。善通寺(ぜんつうじ)の女学生が来た時などは、今の小学校4、5年生ぐらいの子だったので、部品のけんさ係として働かされたのだが、お昼になると、100人も食事をするのはたいへんだったよ。

食べる物も、始めのうちは、ごはんは麦のごはんだったが、それが、大豆になり、[8]こりゃんになり、大豆かすになっていったんだ。そして[9]せきりになった人がいると、ほ



かの人にはうつらないように、はなれたところに、ねかせたりもしてね……。そのうち、せんそうもおわりごろになってくると、食べ物がいよいよなくなってきて、木のくずをメリケンこにまぜて、だんごにして食べたり、さつまいもの葉やくき、それに、かぼちゃのくきまで食べたりしたものだ。

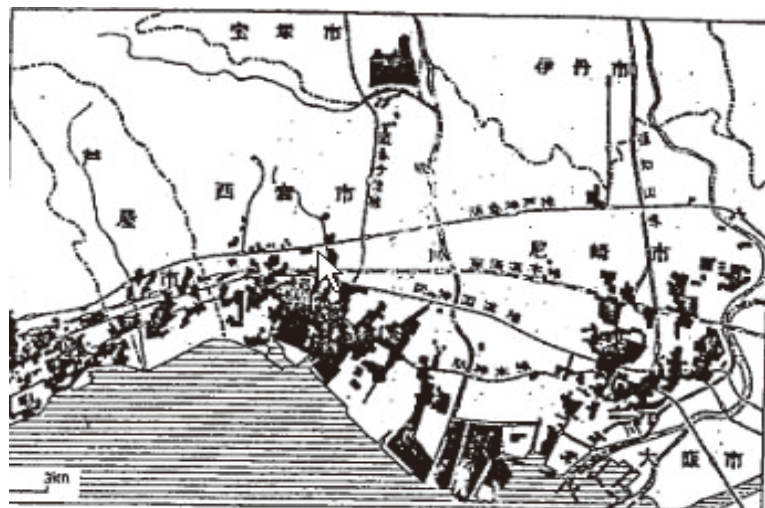
【空しゅうをうけて】

昭和20年の5月ごろになると、宝塚以外の川西こう空きの工場（こうなん、なるお、ひめじ）がB29の空しゅうをうけ、宝塚の工場も、空しゅうを受けそうなので、6月には、きかいを[10]そかいするようにめいれいされたんだ。そこで、きかいを大八車などにのせて、武庫川の松林にかくしたんだよ。

そのうち、兵庫県の中で、空しゅうを受けていないのは、宝塚の工場ただひとつになってしまったんだよ。

7月20日にていきつきがとんできて、ひこうきの中から、ねらいうちし、小がたのしょういだんで、小仁川ぞいのりょうを、全部やきはらったんだ。

7月24日の7時ごろ、空しゅうけいほうが出て、一度かいじょになったんだが、また、B29と小がたせんとうきグラマン150



阪神間被災図 (1960年 兵庫県の都市計画から) (西宮市史)

きが、20き~40きの[11]へんたいをくんで、やってきたんだ。そして、[12]しょういだんを、つぎからつぎへ、とてもせいかくに落としたんだ。その数は、およそ600発。B29が近づいたかと思うと[13]きじゅうそうしやし、何度も何度もばくはつ音がつづいたんだ。

空しゅうが終わった時、工場の中は、何があったかわからないほどメチャクチャになっていたんだよ。ぼう空ごうもやられ[14]ちよくげきだんを受けた女の人が、重なりあって死んでいたんだ。けがをし、手足をとばされ、だれがだれだかわからないほどになって……。本館人事かの入口のあたりは、もうメチャクチャだったよ。



工場がばくげきされているようす



ばくげきされ にげ回る人々

さいわい、普通寺の女学生100人は、武庫川の松林の中のぼう空ごうににげていたので、全員助かったが、このときなくなった人は120人、けがをした人は39人もいたんだ

よ。

[その後・・・]

死んだ人の体は、武庫川のかわらでやいて、ほねを西くらんどのお寺に運んだんだ。身元のわからない人がたくさんいたんだよ。それから20日後、せんそうは、終わったんだ。

### むずかしい言葉のせつ明

- [1] せいふ～ 国全体をおさめるところ
- [2] けんぺいたい～ ぐんたいの中でけいさつのような仕事をするへいたいのこと。
- [3] ごうもん～ 体をたたいたりして、いたいめや苦しいめをさせてむりやりに言うことをきかせること。
- [4] 一つぼ～ たたみ2まいぶんの広さ（むかしの広さを表すたんい）
- [5] ひ国みん～ 日本の国みんとしての仕事をしない者、そむく者
- [6] 朝せんから連れて来られた人～ そのころ日本は朝せんの国を自分の国のりょう土にしていたので、むりに朝せんから、人を連れてきて、土木工事などをさせていた。
- [7] しんじゅわんこうげき～ 日本がアメリカにせんそうをしかける時、せんかんをひこうきでこうげきした。
- [8] こうりゃん～ あわや、ひえのようなこくもつ。
- [9] せきり～ 大ちょうにばいきんが入っておこる病気。高いねつがでて、はげしいげりをするでんせん病。
- [10] そかい～ 空しゅうにそなえて、たてもものや、人やきかいをひなんさせること。
- [11] へんたい～ ひこうきがとぶ時たいれつをくんでとぶこと。
- [12] しょういだん～ 高いねつを出してもえる薬を入れたばくだん。
- [13] きじゅうそうしゃ～ きかんじゅうをれんぞくしてうつこと。
- [14] ちよくげきだん～ ちよくせつ、めいちゅうしたばくだん。

※ 寄稿された教材は

- ① 宝塚空襲の聞きとり
- ② 宝塚歌劇場は海軍の航空隊であった
- ③ アボジ達のおかげで（加害体験）
- ④ ファミリーランドのメタセコイア（国際交流）

の4教材ですが、紙面の都合上①のみ掲載させていただきました。



## 無題

川西 武信

私は昭和18年6月に高司地区で380<sup>もんめ</sup>匁で出生しました。「良元村で小さな子供が生まれたのはお宅ですか」と問われ、6月の誕生なのに炭の配給が有ったと聞いております。育つか心配されましたが、目はパッチリ、赤い顔で大きな声で泣いていたそうです。

戦争体験の事は、母、祖父母、近所の人から聞いた話しか知りません。父の顔も写真でしか知りません。父は昭和20年2月20日フィリピン、ルソン島に於いて33才の若さで最愛の妻子家族を残し戦死しました。父は内地、呉・光等に出征していた時には自宅に帰り私を抱いたり、また戻るときには私は抱かれて、小林駅へ父を見送りに行ったそうです。

高司地区は川西航空機の工場に隣接しており、B29の空襲が頻繁に有り、母、祖父母達と防空壕で、母に目と耳を手で押さえてもらい過ごしていました。近所の防空壕に爆弾が落ち、一人長女を残して一家全滅する家もありました。

現在の自宅は以前は田圃で爆弾が落ち大きな穴が空き、池に成っていました。人が死に馬も足を上げて死んでいました。母、祖母におんぶしてもらい、「お馬ちゃん、足ピーン、くちやくちやく」と言っていたそうです。

農作業中に艦載機からの射撃が有り慌てて牛の腹の下、石橋の下に隠れたと聞いております。米・麦・小麦・馬鈴薯・苺など耕作し荷車をひき、西宮の中央市場、仁川市場へ出荷、お米は安い値段で供出。お米の生産者で有りながら、<sup>はぎかいき</sup>端境期までお米が有ればと祖父が言っていたそうです。

父には妹がおり、母を実家へ帰し妹に養子縁組の話が有ったそうですが、私を1人残してその様な事は不憫に思い、私一人の為に再婚をせず祖父母と農業をして、大変な苦勞をして私を育ててくれました。

母の苦勞を知っている近所の人から度々「大きくなったら母孝行をしいや」と言われて育ちました。私も中学生の時から学校から帰ると農作業を手伝う様に成りました。

母が私一人の為に苦勞辛抱してくれた御蔭で、子供は私一人でしたが、孫は女二人男一人に恵まれ、孫(男)の結婚、その嫁を知り、平成18年6月3日に曾孫(男子)を見届け、母の横に寝かせてもらい、赤ちゃんは大きな声で泣いていました。その2ヵ月後、曾孫の誕生日と同じ8月3日に88才で他界。我家の行く末を見届け、色々苦勞をした人生で有りましたが、海外旅行に各国へ妹達と旅行し、良い人生で有ったと思います。

私達遺族の様な家庭を二度と出さない、作らない世界の恒久平和を願います。遺族の母は100才近く、遺児も高齢と成りました。遺族会会員の減少、今後共に宝塚市遺族会の活動が出来ます様に会員の増強に務めて行きたいと考えております。

最後になりますが、宝塚市遺族会の活動に対しまして、市長を始め、市関係者の皆様方

に大変お世話に成りまして心よりお礼申し上げます。

## 戦争体験記

鞍本 恵美子

戦争体験についてなら、書きたいことはたくさんある。しかし、今の私には長文を書く体力がない。また一方では、今、書いておかねば、永遠にこの体験は失われてしまうという思いもある。いろいろ迷った末、短文形式なら書けるだろうかと思い、私の視点から見た戦争の姿を綴ってみることにした。

### 戦時下の子どもの記憶

#### 一、学校生活

私は昭和十八年四月、神戸市立神楽小学校（当時は国民学校\*）へ入学した。当時はまだ戦時色もうすく、のんびりしていた。学芸会も運動会もふつうに行われていた。ランドセルも買ってもらったが、革製ではなかったと思うし、入学式の写真もない。

二年になった頃から次第に戦局がきびしくなり、登校しても空襲警報のサイレンが鳴ると防空頭巾\*をかぶり、集団下校する日が多くなり、授業どころではなくなった。二年生でキチンと学習したのは算数の九九ぐらいではないかと思う。九九を暗誦できない子は教師に竹のムチで叩かれていた。当時はこの程度の体罰は日常的なもので、教師には絶対服従であった。級長なども教師が指名してきめていた。

学校の校門を入ったところに奉安殿\*があり、登下校の時には礼をすることになっていた。校庭の半分は防火用の池にかわった。校舎の壁には「一億一心」と書いた垂れ幕がかかっていた。紀元節\*など式典の時には、校長先生が勅語を読む間、頭を垂れていなければならなかった。上級生はこの勅語を暗記しなければならなかったが、私達は二年なので免れていた。

この頃、女の子たちの頭髪には例外なくシラミがわいた。母が目の細いすき櫛\*ですいたり、酢水で髪を洗ったりしてくれても、すぐにまたわいていた。シラミは衣服にもわいていた。

しかし、この頃、子ども達の間には奇妙な噂が流れていた。「アメリカでは家の中で映画が見られるらしい」「噛むだけで飲みこまないお菓子があるらしい」などというもので、いくら政府が「鬼畜米英」とスローガンを叫んでも、こういう風評（？）を封じこめることはできないのだ。これはテレビとチューインガムのことであろう。しかし、すっかり頭の中を戦時色に染められていた私は「そんなバカな」と噂を信じなかった。しっかり軍国少女になっていた私は、大きくなったら従軍看護婦になるなどと考えていた。お正月の書き初めにも「うちてしやまむ」などと書いてい



た。この書き初めの作品等は、昨年まで私の手許で大切に保存していたが、昨年、東京九段の昭和館に収納してもらった。

この頃、学校で正規の音楽の授業があったのかどうか記憶にないが、私たちは童謡や唱歌など歌わず、軍歌ばかり歌っていたと思う。自慢にもならないが、私は今でもたくさんの軍歌を歌うことができる。若く柔軟な頭脳に、それらの軍歌はしっかりと刻み込まれたのであろう。当時、私たちは「少国民<sup>\*</sup>」と呼ばれていて、「少国民の歌」というのもあった。アツツ島守備隊が玉砕した時には、その歌も作られ、歌われた。「疎開<sup>\*</sup>学童の歌」というのもあった。学童疎開については章を改めて書くが、その歌の出だしはこうだった。

太郎は父の故郷へ

花子は母の故郷へ

疎開する父母の故郷のある子どもはまだしも幸せであった。そういう「縁故疎開」をする故郷のない子どもは「集団疎開」という格子なき牢獄へ半ば強制的に送りこまれた。そして私もその一人であった。

## 二、学童集団疎開

期間 昭和二十年四月～八月

場所 兵庫県城崎郡城崎町津居山照満寺（現、豊岡市）

昭和二十年三月十七日に神戸は大空襲を受けた。私の家は幸い焼け残ったが、周囲は一面の焼野原となり、私の友人の一人は防空壕の中で死亡した。戦局は一段と緊迫の度を深めていた。学校からの強い勧奨もあり、父母は私を集団疎開に送りだすことにしたようだ。もともと母は最後まで反対だったようで、「行かせないで」と父に訴えていたが無駄であった。この時、私ははじめて父母の諍う声を聞いた。当の本人の私は疎開に行くのを嫌だと思っていなかった。「城崎は冬になると雪が降る」ということも私には楽しみだった。何も知らず、まるで遠足にでも行くような気分で私は生まれてはじめての汽車に乗った。母校の屋上では私たちの列車に向かって日の丸の旗が振られていた。

私たちを待っていたのは、飢えとシラミの大群とイジメの地獄だった。私たちはみるみるやせ細り、声も出せないような状態となった。疎開先の港西国民学校へ、それでも二～三回は行ったのだろうか、地元の子どもたちに「カブラの生徒」とからかわれ、交流は全くなかった。食べられそうなものは何でも食べてみた。海藻のアオサや笹の新芽なども食べた。私は「ワカモト」という胃腸薬を持っていたが、薬としてではなく食物としてそれを食べ、一ビンをあっという間に食べ尽くした。脱走を試みた男の子は教師からなぐる、蹴るの制裁を受けていた。

通信は教師の管理下にあったので、私たちは「元気です」などと嘘を書いたハガ



キを親に出していた。しかし中には要領の良い子もいて、町のポストに直接「迎えに来て」という便りを投函し、親がすぐ引き取りに来たケースもあったが教師の指示にさからうことなど夢にも思わなかった私にはできない芸当であった。

時の政府は子どもの命を護るために集団疎開なるものを行ったのであろう。それならばせめて食料だけでももう少し増配する手だてを講ずるべきだったのではないか。幸い終戦の時まで死者は出なかったが、もっと長く戦争が続いていたら、どうなっていたかわからない。

八月十五日にも私たちは例のラジオ放送など聞かなかった。第一、ラジオがなかった。しかし、どこからともなく噂が流れてきた。「日本は負けたらしい」と。軍国少女だった私は、なぜ神風は吹かないのかと不思議に思った。こうした噂をとめることは決して誰にもできないのである。

本年（平成二十六年）四月、私は七十年ぶりに城崎を訪れた。久しぶりの日本海はまぶしいほど美しく、町なみには大きな変化はなかった。国民学校は同じ場所にあったが、コンクリート造りになっていた。

城崎の美しい風光も、円山川ぞいのコンクリートの道を歩いて行った温泉も、腹ペコでふらふらの私たちには何の慰めにもならなかった。

### 三、家庭生活

この頃の家庭の生活はすべて統制下にあり、米穀通帳<sup>\*</sup>や衣料切符なしでは何も買えず、物品は量、質ともに低下した。

主食の米はわずかししか配給されず、豆やコーリャンにかわった。代用食が「代用」ではなく普通食となった。雑炊、スイトン<sup>\*</sup>が食べられればまだ上等であった。戦後かなり経過した中学生時代（昭和二十四～五年頃）でも私の中学では昼食はいったん家に帰って食べた。雑炊やスイトンを弁当として持ってくることはできなかったからである。

食料、衣料以外の日用雑貨も欠乏していた。石けんやトイレトペーパーもなかった。石けんはどうしていたのか思い出せないが、トイレトペーパーは古新聞や古雑誌であった。トイレはもちろん水洗ではない。

当時の家屋はほとんど木造で現在のような集合住宅はなかった。その家々の前には必ず防火用水の桶があり、むしろや防火ぼうきが置いてあった。爆弾が落ちたら、この桶の水でむしろやぼうきを濡らしてかぶせたり叩いたりして火を消そうという訳であるが、そんなことはできないことは、その後の空襲で実証された。ガラス戸には縦横に紙テープを貼りつけ、天井板ははずされた。自宅の庭や床下には防空壕を掘った。夜は灯火管制<sup>とうかかんせい</sup>といって電灯を黒い布でおおっていた。今、思えば、こんな対策は全く無駄だったのであるが、国民は皆、黙々として従っていた。その頃のことをよく示す戦時スローガンに「欲しがりません、勝つまでは」というのがある。

そして「勝つ」日はついに来なかったのだ。

#### 四、最後に言いたいこと

多くの犠牲を払ったあの戦争で私たちは何かを学んだのだろうか。疑問なしとしない。

戦争は再びしてはならない。もし戦争を始めてしまったら、一日も早く停戦、休戦、講和に持ちこまねばならない。

昭和二十年に終わった戦争も、もし半年前に、つまり昭和二十年の二月頃に終わっていたら、私の友人は死なず、私は疎開先で飢えず、広島、長崎の原爆投下もなかったのだと思うと残念でならない。

## 我が家と「戦争」

齋藤 一義

ささやかなれど、我が家の戦争記録です。

『紀伊田辺行き』

今年（平成26年）1月24日、和歌山県田辺市において同市の歴史資料展が開催され、その一角に「引揚港」の資料も展示されていることを知り、訪れた。

JR紀伊田辺駅に着き、会場の場所を問うために、駅横にある観光案内所へ。

「どなたが引き揚げてこられたのですか。」と、そこの職員さん。「私が1歳の時に、両親と姉とです。私が初めて踏んだ、日本の地なのです。」と答えると、「さきほども『赤ちゃんの時引き揚げてきた』という人が尋ねられました」と教えられる。68年も昔のことなのに、同じ日に同様の人があったとは、なんという偶然であろう。資料展の案内にも「市民でも田辺が引揚げ船の港であったことを、知る人が少なくなっている。」とあるのに。

田辺引揚援護局は、1946（昭21）年2月20日設けられ、4日後から6月20日にかけて引揚業務を遂行。台湾や南方からの帰還者を受け入れた主な港であったようで、22万人以上が上陸していた。全国には同様の港が、舞鶴など10カ所余、設けられたようだ。

第二次大戦は「ポツダム宣言\*」を受諾して終戦となるが、軍人や軍属については武装解除し、日本へ帰る保障がされたが、一般邦人についてはなんら取り決めがなかったものを、マッカーサー元帥の英断によって引き揚げ可能となった、そうである。この時、陸海軍部隊300万人、在外邦人を合わせると660万人が、海外にいたという。

その帰還に必要な日本の船舶は、戦争のため残存する数少なく、引き揚げには8年はかかるとも計算されていた。そこに、米国から215隻の船を油と共に貸与された。

貸与された船は、リバティー型という1万トンの輸送船（等）だが、そのままでは人の輸送には使用できない。5千人の乗船が可能なように、階段・寝床・便所・洗面所・厨房を取り付けねばならず、そのための大突貫工事がされている。「異境で船を待つ同胞を思い」工事に携わってくれた人たちがあった。

そのようにして実現の「引揚巨大プロジェクト」であった。「ポツダム宣言」受諾後、これらの処理がされていなければ、私たち家族や、多くの同胞はどのような運命をたどったことだろうか、お陰で75パーセントの人たちは、1946（昭21）年、年末には引き揚げることができた。（しかし、ソ連からはこの時点、1人も引き揚げなかった。）

田辺沖から舢舨<sup>はしげ</sup>に乗り換え、父母たち約3千人は宿舎へ移動し、頭から真っ白になるまでのDDT散布・検疫・入浴・夕食を行い、帰郷の準備として「引揚証明書」の交付や、郷里の町内会への転入手続きの説明を受けたり、郷里の状況・情報入手などがされていた。

翌日、宿泊施設を出発。一団となり約2キロの道を徒歩で、紀伊田辺の駅へ向う。列車は和歌山駅から奈良経由、京都へ、そこで解散。各方面へ別れるコースを取っている。

私も田辺を訪れた日、歴史展や市立図書館で資料を集め、港や宿舎があった場所、昔の面影を感じさせる駅への道をたどってみた。

この日は1月ながら「寒参りに汗をかく」という陽気が戻った日で、海も街も、どこまでも穏やかであり、感慨無量であった。

帰宅してからは、現在自分のあることに、両親に感謝の念あふれた。

引き揚げの時の両親は、いまの私の、次男夫婦の歳、姉は最年少の孫の歳だったのだ。

### 『父の従軍歴』

いま我家には、父の「軍隊手帳」と、母が生前書き残してくれた「手記」がある。それに我家の戦争を、読み解こうと思う。

父は、1909（明42）年12月、福岡市で生まれ育っている。水泳や野球をやり、柔道は4段黒帯と体力壮健。徴兵検査<sup>\*</sup>では、「甲種合格」。1930（昭5）年20歳、召集令状<sup>\*</sup>が届き、翌年1月10日陸軍第5師団、工兵通信兵として、福岡県久留米で入隊。

入隊9カ月後のこと、中国で柳条湖事件<sup>\*</sup>が起き、その翌年1932（昭7）年3月満州国が建国されている。父は、この3カ月後の6月、関東軍<sup>\*</sup>として奉天に着いている。

この満州事変<sup>\*</sup>勃発に伴い、兵役延長となり1933（昭8）年6月までの2年半の間従軍している。

しかし、それで兵役終了とはならない。満州事変後、1937（昭12）年7月の盧溝橋事件<sup>\*</sup>から、「支那事変<sup>\*</sup>」・日中戦争<sup>\*</sup>へと戦線が拡大。今度は、この年の12月再び応召。1940（昭15）年2月に、復員命令が出ると同時に、臨時編成の命令となり、5月まで延長。この時も2年半の軍務に就いている。

この軍務では、中国本土を転戦。主な転戦地を見ると、第2次上海事変<sup>\*</sup>（1937年8月13日）後の12月下旬、上海に上陸し「杭州作戦」へ、その次は「徐州会戦」参加、無錫を経て「武漢攻略戦二期」「同三期」参加、「南昌攻略戦」参加、1939（昭14）年11月南京へ到着、任に就いている。その後1940（昭15）年5月、九州久留米にて召集解除となる。

その翌年1941（昭16）年12月に「大東亜戦争<sup>\*</sup>」・太平洋戦争となるのだが。

父は、最初の兵役解除後、福岡にあった会社に就職して、1941（昭16）年台湾に転勤となる。福岡の会社の時知り合った母と結婚し、台湾の台北で生活を始めていた。

大東亜戦争開戦3カ月前の9月、この台湾で現地召集され、翌年1942（昭17）年9月までの1年間、今度は南方諸島を転々としている。台湾・高雄を出港、中国・海南島、高雄へ戻り、ベトナム・カムラン湾（船中待機）、インドネシア・バタビア港（船中待機）、同・スマトラ島パレンバン、高雄へと。

この遠征へ出発した間もない10月、台北において姉が誕生している。

そもそも無理なこの開戦。戦局は、制空権を奪われ、制海権を握られ、悪化をたどる。

父は、南方転戦から除隊となり、1年も経たない1943（昭18）年6月から9月にかけて、教育のため警備召集されて補充隊の任務に就いており、さらに、この後1944（昭19）年6月から翌年9月の間は、台湾防衛戦闘などに動員され、この最中の1945（昭20）年8月終戦を迎えている。

この一連の兵隊生活を振り返り父は、「戦争のために生れて来たように感じた。」と、遺している。最初の入隊前に通っていた学校を中途退学して、「15年戦争」と呼ばれる戦争の節々の7年半を軍隊で過ごしている。そのことを思うと、父の言葉は過言とは思えない。このような軍務歴の経験者は、父のみであったのか私には知る由もないが……。

父は長い兵歴故に、1942（昭17）年には、陸軍曹長となっていて、台北で応召の頃は家からの通勤が許されており、私は1945（昭20）年2月、姉と同様台北で生れている。

#### 『「母の手記」から』

「母の手記」の内容に移ろう。

私が生れる頃、米軍はフィリピンから沖縄へ向おうとしていたのか、台湾への上陸はなかったが、台北も空襲には遭っている。母は大きな腹をかかえ、姉の手をひき、父が掘った庭の防空壕へ。深さ1メートル、底には地下水が溜る中に身をかがめたという。

空襲が激しくなり、山の方へ逃れ生活をしている。終戦後にかけては、生活用水さえまならなかった。というし、私の出産後は介助者の手もない生活を強いられている。

1946（昭21）年、引き揚げの話しが聞かれるようになり、3月実現の運びとなる。

「ほかの外地に較べると、台湾は恵まれていた。」と、母は言っているが……台湾基隆港に結集し、両親の故郷福岡へ帰着まで約半月を要したようだ。帰国に際し持ち帰れる財産は大きく制限され、新婚生活で築いた物は無と帰し、許されたのは衣服・食べ物（砂糖10斤など）、量としては1人が背負えるリュックぐら이었다とかで、4歳の姉にも父の急ごしらえのリュックが背負わされた。私は1歳2カ月、体力壮健な父に抱かれていたのだろうか。

引き揚げの途中、姉や母はマラリア熱にうなされながらの帰還。一週間の船中は、甲板で私のオシメの洗濯などをやりながらで、船酔いどころではなかった、とのこと。

紀伊田辺港へ投錨、さらに船中にて一泊している。見える故国の景色はいかがであったろう。でも伝え聞く焼土となった本土、帰郷してからの生活と、現実への不安が募っていたことだろうと思う。

「福岡へ向う汽車から見える都市は焼け野原となり、広島街には何にもなかった。」と母は語っていた。博多に着き、父の実家方面は全焼と知り、同じ市内東側、母の方は無事と知り、帰り着く。涙、涙の再会。母の兄のニューギニアからの帰還が続いたそうだ。



しかし、それからは衣食住のすべてがない戦後生活の始まりであった。住まいは復職できた会社の社宅が建てられるまでの数カ月、間借り生活、転居と大変な辛さを味わっている。父の昼食弁当には、ふかしたイモを詰めて行くという状態。

妹の誕生、しかし、4人を流産している。

戦後不景気の中、父の勤める福岡の会社は閉鎖され、1952（昭27）年大阪へ転勤。私7歳、甲子園へ越して来た。そこでも、社宅住まいだったが生活は苦しく、八百屋が売りに来る物を付けで買い、給料払い、払いきれない不足分は翌月払いにしてもらったりが続いていた。母は「家計簿」を見ては、フーフーと、ため息をついていた。

1964（昭39）年12月、父の定年退職を機に、宝塚へ移り住んだ。

### 『私なりの、さらなる振り返り』

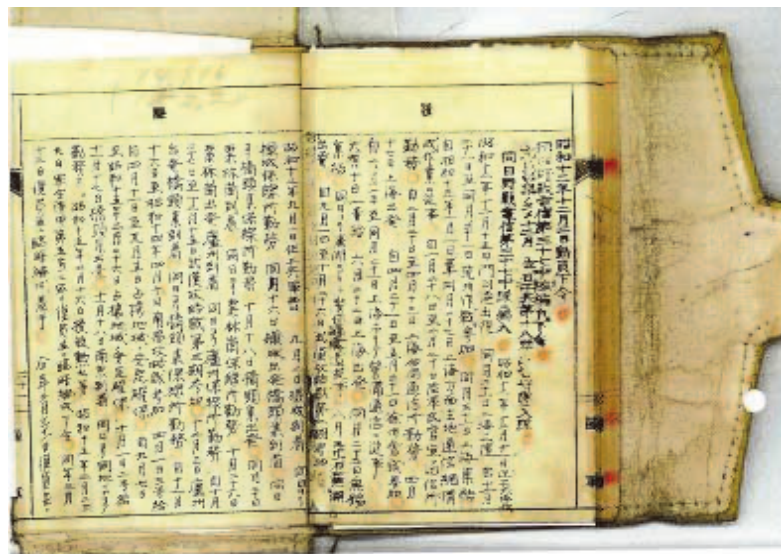
父母の過ごした時代を考える場合の観点として、私なりに振り返っておかねばと思う。

明治以降、「富国」とか「幸せ」の追求の方策として、西欧列強に伍し日本も同様にアジアに矛先を向け、その国の主権・人々の大地や生活を奪い、文化や人権を踏みにじった事実を、加害者の立場において省みらねば。

私は引き揚げてこられたが、日本・樺太・南方へ強制連行などされた朝鮮・中国の人たちがある。その帰還はなされたのだろうか。あるいは「戦後処理」と言われる諸問題。日本兵についても、外地に放置されたままの遺骨。

これらも顧慮されなければ、真の戦後と言っていいのだろうかと思う。

「一億火の玉」と叫び翻弄された戦前への反省のものと現「憲法」、基本的人権や主権在民、恒久平和の真髄は、いまでも、いつまでも、<sup>しゅぎょく</sup>珠玉のものと考えています。





軍隊手帳写真 齋藤さん提供





## 学徒勤労働員

阪本 治男

### 1、ペンを捨てて

昭和18年に入り戦局が厳しくなると理工系以外の学生は一斉に徴兵され（学徒兵出陣※）、翌19年の春には学徒勤労働員※令によって、旧制中等学校第三学年以上の生徒が軍需工場等へ勤労働員された。さらに同年の秋には中等学校第一・二学年の生徒にまで動員範囲が広がったため、商業学校第二学年だった私の学級の生徒50人は尼崎市大浜町にある久保田鉄工所武庫川工場で、同年11月から翌20年8月（終戦）まで<sup>いもの</sup>鋳物作りの仕事に従事した。

### 2、職場の仲間

国家総動員※体制によりこの工場に動員された者は、私たちの他に徴用※令に基づく徴用工が大勢いたが、昭和19年12月からは半島人（内地出身者は内地人、朝鮮半島出身者は半島人と称した）の徴用工30人程が、工場の近くの工員寮から通勤して私たちと一緒に仕事をし始めた。半島人徴用工は内地人徴用工と違って二十歳代の若者が多かった。徴兵制度は戦争末期まで半島人には適用されなかったもので、多くの若者が徴兵されずに残っていたらしい。また女子挺身勤労令により女子挺身隊※の若い娘さん二十人程が、私たちの作業場の隣<sup>いがた</sup>の作業場で小さい鋳型を作っていた。

そのほか、二所ノ関部屋の相撲取りたちも力自慢を期待され、興行以外の時期に玉の海親方に引率されて、資材運搬などの力仕事をしていた。その中に戦後プロレスラーに転向して有名になった力道山も含まれていたことを戦後になって知った。

### 3、食糧難

昼には給食を支給された。中身は米粒よりも<sup>とうもろこし</sup>玉蜀黍のほうが多かったが、それでも食糧難時代には有難い食事だった。また月に1～2回程はおやつと称して増産団子が数個ずつ配給された。団子と言っても<sup>さなぎ</sup>蛹の粉<sup>ぬか</sup>が糠のようなものを練り合わせたただけであって、苦いか酸っぱいのかわからず、とても美味しいとは言えなかったが、それでも当時は貴重品であり、時には恋の使節を勤めた。美人の女子挺身隊員には思いを寄せる男子工員から増産団子が贈り物として届けられていたが、そんな団子が美人の心をどの程度惑わせたのだろう。

### 4、通勤地獄

朝の出勤時間帯は阪急・阪神両電鉄とも常に超満員であり、乗客を何人も積み残して発車するのが常態だった。そして、阪神電車では20人程の英国兵捕虜と同乗することが何

度もあった。彼らは神戸の捕虜収容所から尼崎方面へ超満員電車で揉まれながら通勤していたらしい。

昭和20年に入り空襲が増え始めると、当初は警戒警報発令だけでも交通機関は運転を停止したが、戦争末期には警戒警報発令では運転停止せず、空襲警報発令の時だけ運転停止した。

## 5、志願兵

その頃、何人かの級友が海軍飛行予科練習生（予科練<sup>\*</sup>）その他の志願兵として入隊したが、彼らを送り出した後は自分だけが取り残されているような寂しさを感じた。志願する動機としては国難の最前線に立つためというだけではなく、いずれ徴兵されるのであれば、その前に志願するほうが昇進は早いと言われていたこともあって、私も志願しようと考えた時があった。しかし私は体が小さく頑健ではなかったので、志願しても試験に落第して恥をかいただけだと思って尻込みしていた。

軍に志願する者は工員たちの中にもあり、合格者が入隊する直前には、親しい仲間数人が昼の休憩時間に壮行会を開いて祝福した。壮行会と言っても食べる物はないし、飲み物も水道の水即ち「鉄管ビール」しかないから、歌ったり踊ったりして鉄管ビールを飲むだけである。Kという工員も海軍に志願し入隊した。彼は入隊の数日前に、ある女子挺身隊員に愛を告白したのに振られたらしく、入隊までの数日間は意気消沈していた。そして勤務最終日の壮行会するとき、彼は吠えたり暴れたりと表現するのが相応しい荒れ方で歌い踊った<sup>あげく</sup>拳句、鉄管ビールをがぶ飲みして大竹海兵団へ向った。

## 6、空襲激化

昭和20年3月頃から阪神間にも米空軍の大規模な空襲が繰り返されるようになった。大阪が同年6月1日の昼前に絨毯爆撃<sup>じゅうたん</sup>された時、私たちは超重爆撃機の大編隊が大量の爆弾を大阪の町に投下するのを最初から最後まで目撃した。その日出勤してすぐに空襲警報が発令されたので、直ちに防空壕に潜りこんだが、暫くすると腹の底に響く爆音が地響きと共に迫ってきたので、防空壕から出て見上げると、超重爆撃機ボーイングB29の大編隊が尼崎沖上空を大阪方面に向かって突進しつつある。九機編隊が9個、整然と並んでいるので、総機数81機という計算はすぐにできた。忽ち高射砲<sup>たちま</sup>\*陣地が吼え始めたが、敵機は落ちてこない。大編隊が私たちの前を通り過ぎたとき、何百個かの黒いゴマ粒のようなものが編隊の後を追うように飛んでいるのが見えた。爆弾だ。それから1分間くらい経つとゴマ粒の大群は大阪の町へ落ちていき、暫くすると「ドロドロドロ」という音が地響きと共に地面を伝わってきた。続いてどす黒い煙が大阪の上空に湧き上がった。その頃に次の81機が尼崎沖に近づき、第一波と同じように尼崎沖上空で黒いゴマ粒をばら撒いて生駒山方面へ飛び去った。この日はこんな要領で、81機ずつの大編隊が五～六波くらい来襲した。何回も大編隊で爆撃されるのを見ているうちに、我が軍が何故反撃できないの

か悔しくなったが、どうすることもできない。しかし、最後の81機が尼崎沖上空に差し掛かった時、突然先頭の一機が真っ赤な火柱を噴き出した。火は一瞬で消えたが、同時にそのB29の機首がぐらっと下がり、続いて垂直降下し横倒しになり裏返しになりながら墜落していった。特攻機が体当たりしたらしい。空の要塞とまで言われた超重爆撃機が断末魔で演じる豪快な木の葉落としは正に壯観であり、溜飲の下がる思いがした。

ところが、大阪の町は大被害を受けていた。大阪の空には黒煙が広がり、夕方には六甲山上空にまで達して大阪平野の空全体が真黒になった。阪神・阪急両電鉄とも夕方まで不通になったので、私は自宅（当時の良元村）まで武庫川堤防上の道を歩いて帰った。夜には黒い雨が降った。

私たちの工場の西側には武庫川を挟んで1キロメートル程離れたところに川西航空機製作所鳴尾工場があった。ここでは「零戦」に代わる海軍主力戦闘機「紫電改」を製作していた。この工場が6月9日に爆撃された時は敵編隊の進行方向が私たちのほうに向かってきたので、ゆっくり見物する余裕はなく、防空壕に隠れていても「ザー」という爆弾が風を切って落下する音が聞こえてきた時は、死の恐怖に襲われた。この会社の宝塚工場（現在は阪神競馬場）が爆撃された7月24日は、電車が動かず私は出勤しなかったのも、またも爆弾が落下する音に脅された。被爆現場からは多数の死傷者が担架やりヤカー・大八車・雨戸などで運びだされ、良元小学校と第一小学校に収容された。

7月末頃、局地戦闘機ムスタング2機が超低空で急接近してくるのに気付かず、機銃掃射の音で初めて気付き、反射的に道路脇の側溝に飛び込んで伏せたことがあった。

## 7、疲労困憊

7月頃から敵機は夜も飛来した。夜中に空襲警報が発令されたら布団から起き上がって防空壕に潜り込むのであるが、夜の空襲が何日も続くと、敵機の爆音が聞こえてきても「爆弾が落ちてきたら死んでやる」とヤケクソで寝たままの時もあった。また「日本が負けてもいいから早く戦争が終わって欲しい」と弱気になる時もあったが、「日本が負けたら過酷な仕打ちをされるから、苦しくても勝つまで頑張ろう」と気を取り直していた。

ある日級友から「広島に新型爆弾が落とされて町全部が焼け野原になった」という話を聞かされて、日本はどうなるのだろうと心配していた時、ラジオが「ソ連軍が満州へ攻め込んできた」と放送するのを聞いたので、「日本はこれで終わりか」と諦める気持ちが湧き始めたが、それでも「勝つまで頑張ろう」と気持ちを奮い立たせた。

## 8、職場が壊滅

8月10日の夜、私たちの工場の電気室と周辺施設が爆弾で粉碎された。翌朝出勤してその惨状を目撃したが、南側の空き地を見た時はもっと強烈なショックを受けた。勤務時間中に空襲警報が発令された時にいつも数人の級友と潜り込んでいた防空壕のあたりに爆弾が何発も落ちたらしく、私たちの防空壕は影も形もなくて、あたり一面は砂漠を掘り返

したような大きな弾痕だらけだった。もしこの爆撃が昨日の勤務時間中に実施されていたら、私も級友たちもバラバラ死体となって空高く吹き飛ばされていたはずだ。電気室が壊滅すれば、生き残った工場の機械も動かないので、仕事は何もできず誰もが放心状態になっていた。

## 9、本土決戦を覚悟

私はいつの間にか壊滅したガラクタの上に腰を下ろして考え込んでいた。政府は「本土決戦で最後の勝利を掴もう」と訴えているので、もうすぐ本土決戦が始まり私たちも戦闘に参加することになるだろう。そうなれば私が生き残れる見込みは殆どないが、私が死んでも日本が勝てたらそれでよい。そのことは既に覚悟できているはずであったが、これまではまだ先の話だという感じで、他人事のように考えていた。しかし、無数の弾痕を眺めていると、本土決戦は間近だという切迫感に襲われて、敵の大艦隊が既に大阪湾に突進してきているという錯覚が突然頭に浮かぶなど、頭が混乱していた。

## 10、玉音放送

8月15日の玉音放送<sup>ぎよくおん</sup>※を私は自宅で聞いたが、「共同宣言を受諾する」とはどういう意味かわからなかったので父に尋ねると、父は「この戦争を引き分けで終わらせようという意味だろう。日本側は随分追い込まれたから仕方がない」と答えた。しかし引き分けでは私は納得できなかった。いくら苦戦に陥っても最後は勝つはずだ。そのため放送内容が何かの間違<sup>かじ</sup>いであることを期待しながらラジオに齧り付いたが、続く放送内容は私の期待を裏切るものばかりであり、我が国の大敗北であることを徹底的に思い知らされて、私は悔しさのあまり放心状態に陥ってしまった。

その日の夕暮れ時に鳥の鳴き声が特別に大きく聞こえたことを、今もはっきり覚えている。

短歌 五首

塩江 昭子

防空壕も煙がふさぐ出なければ  
神戸御影も焼土と化して

衣類を持ち坂のぼり来る姉を待つ  
愛媛五良野の縁故疎開地

弟は昭和二十一年夏に死す  
御影の海の事故は悲しき

姉たちと水着姿で行き来して  
処女塚をよぎりしあの頃

今は亡き父母の労苦の偲ばるる  
悲しき昭和くり返すまじ

平和への願いは永遠です。日ごろは胸の奥深く抱きしめている思いを詠んでみました。







## 語り継ぐ～運命を大きく変えた～「8月15日！」

菅波 英治

私の運命を大きく変えた日、それは決して忘れることの出来ない（1945年）8月15日。

終戦のその日から、ソ連軍と八路軍<sup>はちろくぐん</sup>※（中国共産党軍）の、日本人を狙った略奪、暴行が始まったのです。その行為は、引き揚げ船に乗るまで続きました。その想像を絶する恐怖と、今日、食べるものが無いという極貧の生活の体験を今になって考えてみると、大人になってからの自分に大きな糧となっていると思い、子どものころの体験を記します。

先ず、終戦の少し前（1）1945年8月9日、突然の“ソ連軍”来襲！！です。

1～1、この日、“日ソ中立条約”<sup>※</sup>を一方向的に破ったソ連軍が、満州へ攻めて来た。

1945年8月9日、ソ連軍が、国境を越えて戦車の音を轟々と立てて入って来た。（日ソ中立条約は1941年4月13日、有効期間5年間として調印していた。）

ソ連兵は、土足で我々の家へ入り、片っ端から掠奪をはじめた。娘さんや若い奥さんは家族の目の前で乱暴され、数日後に自殺をなされた人も少なくありません。

そのとき日本軍は既に武装解除していた。その軍人を日本へ帰すと称してシベリアへ強制連行したのです。そのとき、残された幼児たちを満州人（現中国人）の養父母に預けられ育てられました。その人たちが後に「中国残留孤児<sup>※</sup>」と呼ばれ、その処遇に日本政府は大きな課題を残すことになったのです。

ソ連の攻撃は、日本がポツダム宣言<sup>※</sup>を受け入れ、正式調印する1945年9月2日迄続きました。

次は、（2）1945年（昭和20年）8月15日：終戦の日・・・そのとき私は！？

2～1 間一髪で中国残留孤児<sup>※</sup>になるところを救われた。

終戦の日、私は国民学校<sup>※</sup>（現在の小学校）四年生の夏休みでした。

お昼前、父が役所から帰って来て、「今から大事な放送があるから聞きなさい」と言って、ラジオに耳を傾けたのが「玉音放送<sup>ぎよくおん</sup>」<sup>※</sup>だったことを中学生ぐらいになってから知りました。

・・・日本は戦争に負けた・・・。

放送が終わると父は役所へ出かけました。なんと「ソ連軍が来るので白旗を持って出迎える！」とのこと。

母は、私と弟（1歳8ヶ月）を連れて、隣の県長宅（満州人）を訪ね、私たち子ども二人を預かって欲しいと頼みました。そして、両親は他の職員と一緒に玉碎（自殺）する予定で各家にピストルと実弾を配っていたとのことでした。

ところが、「ソ連軍が来る」と言うのはデマ（ウソの情報）だったので、<sup>きゆうきよ</sup>急遽我々日本人は貨物列車を仕立てて、衣類や貴重品・お金など皆が持てるだけ持ってハルビンへ向けて疎開<sup>\*</sup>したのです。私と弟は間一髪で中国残留孤児になるところを救われました。

では、（3）終戦直後、外地（満州）ではどんな状況だったでしょう？

### 3～1 ハルビンで体験した掠奪と暴行の悲惨な生活

終戦の翌朝、ハルビンに到着した。その行き先は「満州赤十字病院看護婦養成所」跡の3階建てのビルでした。勿論、医師や看護婦は一人も居ません。周囲を鉄条網で囲い、外敵の侵入を防いでいる格好でしたが、満州人（中国人）の物売りや、コソ泥のような連中が鉄条網を破って入って来る。また、ソ連兵が掠奪に来る。ソ連兵の中には両腕に“腕時計”を幾つもはめて自慢する者や、掠奪したモノを満州人に売りに来る者など、世の中はタッター一日で豹変<sup>ひょうへん</sup>しました。終戦と同時に我々日本人の周りは敵だらけになったのです。米軍が占領した日本国内とは大違いでした。

### 3～2 終戦の日からお金はソ連の“ルーブル”しか使えない

終戦の日からお金はソ連のルーブルしか通用しなくなって、手持ちの“円”をルーブルに交換しなければ物を買えない。その交換レートなんてその人によって異なるという全くデタラメな状況でした。

### 3～3 食事は、コーリャン又は粟のお粥を缶詰の空き缶に一人一杯

この看護婦養成所跡では、約200名収容され、食事は中庭に大きな釜を据えて、コーリャンのお粥を一人一食に缶詰の空き缶一杯（コップぐらいの大きさ）の配給となり、どんだりの生活の始まりでした。

コーリャンを買うお金は皆で出し合う、そして、働ける人は使役や街での“立ち売り”を始めた。約一ヶ月後に、次の疎開場所「元ハルビン職員の官舎」へ移転しました。

移転した官舎では一軒（三部屋）に二世帯が住む生活でした。父が満州国官吏の要職だったので毎日のようにソ連兵が探しに来る。父は逃避していましたが、ある日他の日本人

の密告で捕らえられ、その年（1945年）の12月にシベリアへ抑留されたのです。母は三男を出産したばかり、私は次男（当時2歳）の子守、働き手は誰もいない。食事はコーリヤンや粟のお粥を一日二食。石炭を買うお金がなかったので、暖房（ペチカ）も同居していたNさん一家（夫婦と子ども3人）が時々焚くという生活でした。

Nさん一家は、福岡県田川市の出身で、長女と私が同級生でした。博多に辿り着くまで大変お世話になりました。

母が、翌年の1月頃から生後3ヶ月の弟を背負って街に出て“立ち売り”を始めました。私は次の弟を<sup>み</sup>見ていましたが、時々下の弟に飲ませるミルクなどないので、柔らかい布に水を染み込ませて与えていたことが忘れられません。

相変わらずソ連兵は毎日のように掠奪・暴行に来るとい生活が日本への引き揚げが始まる1946年5月頃迄続いていました。娘さんや若い奥さんは皆丸坊主にして男装していました。ところが、一方で“男狩り”が盛んになって、男装でも危ない状況になりました。“男狩り”とは、ソ連兵に八路軍（中国共産党軍）が加勢して日本人の男性をシベリアへ強制連行し、極寒の地でシベリア鉄道建設などの強制労働をさせるためです。

その対象は元軍人だけに限らず、元開拓団の人たちなど民間人も皆狙い撃ちにされた。

### 3～4 祖国への長い旅・・・屋根のない貨物列車と歩きと野宿の繰り返しで・・・

1946年（昭和21年）5月頃、いよいよ日本へ向けての旅の始まりです。現在なら空路で数時間もかからないところですが、当時は列車に乗るにもままならない、まして敗戦国日本人と知れば、普通の客車には乗れません。

過去に日本が南満州鉄道を買収し、さらに延長してほぼ満州全域にまで発展させ、更に超特急“アジア号”（現在の新幹線と同等）を走らせました。また、“撫順炭鉱”という露天掘りの巨大な炭鉱を創り、地下資源の開発や鞍山製鉄所の建設など、その投資額は当時の日本円で約600億円といわれています。（当時の公務員の平均月収約20円）

それだけ巨額の投資をして、その設備をそのまま中国に残して引き揚げるとき、その鉄道をマトモに使えない。戦争に負けるという事は、何とも哀れなことです。

#### \*貨物列車に乗るにも“袖の下”を要求する中国人の機関士

さて、いよいよハルビンを出発する日になりました。日本へ帰る準備で、他の家ではおおわらわでしたが、うちは本当に帰れるだろうか？母は3人の小さな子どもを連れて、荷物を持って、どうやって帰ろうか？と大変な思いだったと思います。

母の出で立ちは「生後6ヶ月の弟を前に抱いて、2歳5ヶ月の弟を背負って、左右にオムツや下着などを入れた袋をたすきがけにして、私の手を引いて」の格好でした。

私は、自炊用の小さな鍋と洗面器、アルミのコップを持って出発しました。総勢

4～500名の団体は、着の身着のままハルピン駅へ。そこから屋根のない貨物列車に乗り込んだ、ところが、何時間も動かない。団長さんやお世話係の人たちが慌しく走り回ってようやく動き出した。後から聞いた話によると機関士からチップを要求されたという。

“袖の下”が必要なのです。（“袖の下”とは「賄賂」のこと）

ハルビン→新京（長春）→奉天（瀋陽）→錦州→葫蘆島（コロトウ）まで、列車で移動する予定だったのが、途中何度も歩いて、野宿しての繰り返し。5月～8月頃は、日中の気温は25度くらいになりますが、夜は10度以下になる厳しさです。

ハルビンから約1,200kmを約5ヶ月かけて葫蘆島の港に辿りついた。我々一行は皆ボロボロの姿でシラミと同居しながら、周囲は敵だらけの中をよく生き延びてきたものです。

乗船したのは旧日本海軍の駆逐艦でした。乗船して艦長から「お疲れ様でした、ご安心下さい、本艦には日本人だけです。敵はいません！」と聞いて皆本当に安心してその日は死んだように眠り込んでいた事を忘れられません。

このとき、約1年間続いた恐怖の連続から開放されました。子どもなりによく辛抱できたことと思います。

駆逐艦に乗るのは、最初で最後の体験だった。乗船したときと、博多に着いたとき、頭から全身に“DDT（殺虫剤）”を掛けられて真っ白になった。

その翌日「博多港」に着いたときの検診で伝染病の患者が発見され、約一週間湾内で停泊した。・・・上陸して、引揚者援護センター（正式の名称は不明）で入国手続きを済ませ、そのとき10円紙幣を1枚貰った。（勿論一家族に10円）

そして父母の実家の在る福井へ向かいました。途中の列車の中で“さつまいも”の蒸かしたのを貰った事を忘れられません。福井に着いたのは翌日の夜8時頃だった。

そのとき、私には「福井が故郷」とは思えませんでした。

・・・終わり・・・

# 私の戦争体験

田邊 はる

はじめに

国民学校\*4年生のとき終戦を迎えた私の戦争体験は幼い頃だから自分を中心にして、今も覚えている事実だけを記している。そのことを承知して読んでいただきたい。

## 一. 永久の別れ

1941（昭和16）年8月、父に召集令状\*（赤紙\*）が届いた。母が父にその旨を伝えている時は、雷鳴が轟き、しのつく雨の夕立であった。父は縁側に立っていて、その後姿を私は泣きそうになりながら、すごく淋しい気持ちで見つめていたのを覚えている。

秋の夕暮れ頃、父が南方（マレー半島）へ発つというので、母に連れられて京都駅の地下道へ行った。ほの暗い地下道で待っていた。やがて「ガッ、ガッ、ガッ」と軍靴の響と共に兵列が目の前を通過して行った。幸いにも父の「ここ、ここ」という声に必死で顔は見たけれど、あっという間に通り過ぎて行った。この光景と軍靴の響は今も鮮明に蘇る。

それから1年余、今度は叔父（父の弟）にも赤紙が届いた。大阪駅の北側の貨物駅に列車が到着するというので、母がひとりで見送りに出かけた。列車の窓を探すのもたいへんだったようだけど、母を呼ぶ声で逢えたそうだ。今思えば映画の一場面のような。

叔父は沖縄からマリアナ群（諸）島辺りを航行中に船が撃沈され、今も海底に眠っている。24歳だった。広報は早く届いたが、遺骨となる白木の箱が戦後に届いた。中には氏名を書いた小さな木札が一枚入っていた。家族はその包みを囲んで、誰も声を出さなかった。兄弟は、父の出征の日が永久の別れとなってしまった。

## 二. 国民学校生活

1942（昭和17）年4月、私は国民学校（小学校）に入学した。

入学準備のため、母は阪急百貨店へ行った。筆箱、下敷きはセルロイド製のエンジ色で、これは卒業まで使っていた。一番うれしいランドセルは硬い布らしく、蓋の部分は赤いレザーと称するものだったが、ポロポロと欠けて落ちた。紺色と白色のチェックのワンピース、二足買ってきた靴は豚皮で、2、3度水に濡れるとパッキリとつま先の部分が口をあけ履けなくなった。

入学式は、御真影\*と日の丸の旗以外は印象に残っていない。国定教科書による授業が行われ、ドリル類もあった。2年生までは、まあ授業は普通に行われていた。

1年生の国語教科書の最初は左右2ページを使って山から昇る朝日に向けて数人の男女の子どもがバンザイをしている絵があった。

右ページにアカイ アカイの2行、左ページにアサヒ アサヒと2行書かれていた。当時は一年生でカタカナを、二年生からひらがなを学習した。神国日本を象徴する内容になっていたのだ。音楽も三年生ころには、「予科練<sup>よかれん</sup>※」の歌など軍歌も習い、今とは異なる「お山の杉の子」はすごく人気があった。図画の教科書には模写があった。戦闘帽<sup>はんごう</sup>、飯盒、カブトなどが。もうクレヨンも代用品なのか色が正しい色になっていなかった。紙のカブト<sup>かぶ</sup>を被った「フクチャン」の漫画を真似て描いていた。

学校行事は、運動会は一年生で「お馬の親子」の団体競技をしたのと、戦後の6年生の2回。遠足は一年生の春に行基寺へと6年生の秋の2回だけで修学旅行はなかった。

二年生からは毎月1回、分列行進があって1クラスずつ朝礼台上に立つ校長先生に向けて、級長の号令に合わせて「頭、右」をして通過、校長先生は敬礼で応えていた。

神社参拝も毎月1回行われた。私用で歩いていても神社の前で立ち止まり直立しておじぎをするよう義務付けされていた。そしてどこからか天皇陛下という声などを聞いたときも同様であった。「お国のため・・・」と「欲しがりません。勝つまでは。」と我慢の連続で、軍国主義教育を徹底して叩き込まれた。教育の力は恐ろしい。

4年生になると「修身<sup>しゅうしん</sup>」の時間があり、まず第一に教育勅語<sup>ちよくご</sup>※を覚えてひとりずつ教室の前に出て暗誦<sup>あんしゅう</sup>させられた。ことばも文字もむずかしい。棒暗記し、家族に聞いてもらって練習したものだ。こんなこともあった。

入学後の4月から月一回強制的に貯金をさせられた。日の丸貯金といって通帳の表面中央に大きな日の丸が印刷されていた。

担任の先生が集めていたが、1月には「お正月でお年玉をもらったでしょうから。いつもより多くしなさい。」と。出征して父が留守の子も一私もそうだったが、一、戦死して父を亡くした子も大勢いるのにと心の中で反撥<sup>はんぱつ</sup>していた。一年生の後半頃から配給品があった。ゴムまり、下駄（靴がなくなってきた）三角衿のセーラー服、白いブラウスなどだがクラスに5人分くらいなのでくじを引いた。私は当たったことがなかったが、それも2年生の終わりごろにはなくなった。国家の窮乏<sup>きゆうぱん</sup>ぶりがわかる。

3年生になると警戒警報や空襲警報<sup>ひんげん</sup>が頻繁に出るようになった。授業中であれ、夜中であれ、いつサイレンが鳴るかわからない。

母が着物をつぶして作ったモンペ服上下に救急袋と防空頭巾<sup>ずきん</sup>※を両肩にたすき掛けして通学した。学校で警報が出ると走って10分以内に帰宅できる子だけが班になって帰った。他の人は先生の指示を受けて机の下にもぐっていたと聞いた。1日に3回ぐらい往復したこともあり、一回だけ地面に伏せたことがあった。伏せる判断は子どもがしたし、生命がけだから必死だった。

もう学習時間が少なくなり、夜も防空壕<sup>ぼうくうごう</sup>に避難するからゆっくり眠れなかった。警



報が出て真っ暗な中で身づくろいができるように、枕元には順番に衣類をたたんで重ねて寝た。庭の防空壕からのぞいて見ると、数本のサーチライトの交叉する中で敵機が落ちていくのを見たとき、すごい！と思ったものだ。

大阪大空襲のときは赤々といつまでも燃える火の手がはっきり見えて不気味な光景だった。

4年生になって飛行場が近いので集団疎開の話が出た。我が家では祖母もいたので縁故疎開をすることに決定した。

### 三. 疎開

1945（昭和20）年6月15日、伊賀上野の親戚へ疎開<sup>\*</sup>した。学校へは小さな裏山を越えて集団登校した。6年生班長が職員室の入口で大声で班の報告をした。

都会とはずいぶん異なる雰囲気の中で一番困ったのは畑を作る作業で、畝<sup>うね</sup>が作れず疎開の子はいじけて、心細くて集まってしまった。

「都会の子」といじめられて、遂に学校に行かず山で遊んで帰って叱られたりもした。

8月15日、座敷に正座して玉音放送<sup>ぎよくおん</sup><sup>\*</sup>を聴いたが何を言っているのかさっぱりわからなかった。夕方、敗けたんだと知った。子ども心にどこかでほっとした気持ちが湧いてきた。

### 四. そして戦後

戦争が終わって学校生活もがらりと変わった。3年半の間に学習した教科書の墨塗りが始まり、習字の墨を筆にふくませて先生の指示する行を消していく。一頁のほとんどが消された。全科目に塗り、軍国主義的な内容は姿を消した。戦後2年間くらいは衣食住の全てが戦争中より厳しく、文房具では消しゴムに困った。5年生では教科書は新聞紙と同様1枚に数頁分が印刷されていて、頁番号にあわせて切り分け、紐<sup>ひも</sup>のような物で綴じ、表紙をつける。材料も自分で探し、自分で作成した。材料もなく全教科だし、きょうだいの分も含めると大変だった。ページをめくるときに破れて困った。6年生のとき、「民主主義」という本物の教科書が配られ多数決とか新しい物の考え方を学んだ。通知票は 優・良上・良・良下・可の5段階評価が、5、6年生では先生の手書きの文章表現に変わった。卒業証書は小さな紙に先生がペン書きし、手刷<sup>てず</sup>りで作成したものだった。

国民学校に入学し卒業は小学校になっていた。まだ街には空襲のガレキが残るなかで、6・3・3・4制に変わり、中学1年のときに、3年間だけ使われたという「あたらしいけんぼうのはなし」という新憲法の本を習った。今も復刻本が手元にあるが、女の子の私にとって、未来がすごく明るく、開放された気分になって、やっと戦争が終わったんだと思えたし生涯忘れないであろう感動であった。



おわりに

まだまだ思い出すことがたくさんある。

人生の終わりに近づいて、この文章を書きながら真白な頭に軍国主義教育がしっかり入りこんだ子ども時代。その中でも子どもは元気で、明るかったかな？

どうかこの先、あのトンネルの中で聞いた軍靴の響がやって来ない平和な世の中でありたいと願う。

小学生が読んでくだされば幸いなのでやさしく表現したつもりである。

## 戦争はいやだ！～11歳の難民生活の回想～

西澤 慎

わたしは旧満州（現中国東北地方）で国民学校\*5年生（11歳）の時、1945年8月15日の敗戦を迎えました。

大本営\*発表を信じていた少年は、戦争が終わったと聞いて、日本が勝ったと思ったのです。当時「満州は日本の生命線」「五族協和\*」「王道楽土\*」のスローガンで多くの開拓民（約27万人・5万7千戸）を送り込んだ国策だったのです。

わたしたちの開拓団は大阪昇平開拓団といいハルピン郊外の安達<sup>アンダ</sup>から10里（37km）にある昇平鎮<sup>ショウヘイチン</sup>というところでした。

わたしたちの苦難は敗戦から始まりました。

まず満州人が襲ってくるというので、各部落に住んでいた団員家族を昇平鎮内の学校に集結した。幸い襲撃はありませんでした。

いよいよ開拓地を放棄して鉄道のある安達へ行けばと、荷物は大車<sup>ダーチョ</sup>に積み、歩けるものは子どもも歩いて安達へ向った。雨季のドロ道、時には子どもの胸まで水に漬かりながら、途中の林安<sup>リンアン</sup>で一泊。翌日現地人の道案内で出発。ところが安達の方角と違うところへ行こうとしていたのです。丁度そこへソ連の騎兵が通りがかり、「どこへ行くのか」と聞くので「安達」だというと、反対の方角だと言うのです。現地人たちはあわてて逃げて行きました。

匪賊<sup>ヒゾク</sup>と打ち合わせて襲われたら大惨事になっていたかも知れません。余分に歩かされ安達に着いたときは、ドロドロのまま泥のように眠ってしまいました。この逃避行で7人の人が死んでいます。

安達に着いた735人を収容する旅館はなく、馬車引き（穀物を運搬する馱者<sup>ぎょしや</sup>）の馬舎という粗末な簡易宿でした。長い土間の両側に爛<sup>かん</sup>といって寝るところの下に火を炊いて煙を通し暖を取る床にアンペラ（コウリヤンの皮を編んだ粗末な敷物）を敷いてあるだけです。戸外は治安が悪いので子どもも女の人も1日中閉じ込められ、安達の生活は、恐怖の生活しか覚えていません。それは次のような事でした。酔っぱらったソ連兵3人が、マンドリンと呼ばれていた自動小銃で所かまわず天井に向けて、ダダダダと撃って「ダワイ」「ダワイ」と何の抵抗もできないのをいいことに、金品特に時計を強奪していき、女性をつれていくのです。それから毎晩恐怖の連続でした。

わたしの姉（18歳）も髪の毛を切り丸坊主にして、顔に炭を塗って、胸はさらしできつく巻いて男になり難を逃れたのですが、髪を切った日は一日中泣いていたのを覚えています。母をソ連兵が連れていこうとした時、わたしがしがみつき大声で泣きましたら、ソ連兵もあきらめました。

それからはソ連兵が来ると子供たちは大声で泣き、口々に「コマンダー」「コマンダー」

と言って泣きます。わたしたちは“困るんだー”と思っていたのですが、コマンダーはロシア語の司令官のことだったのを後に知って大笑いでしたが、その時は必死で泣き叫び、幼い児は本当にお尻をひねられて泣いていたそうです。

9月に入ると気温が一気に下がります。例の爛で暖をとるにも燃料がありません。食べ物も乏しく、<sup>しらみ</sup>虱による発疹チブスが伝染して、40℃の高熱をだし<sup>うわごと</sup>譫言を発して死んでゆくのです。12月にハルピンに出発するまでになんと166人が死んでいます。

松花江（スングアリー）は氷結しており貨物列車のすき間から見るとトラックや戦車まで走っていました。川幅50m～80mの河がですよ。如何に寒いかがわかるでしょう。

真冬は-20℃～30℃が常温です。

ハルピンはマジヤコウにある花園国民学校という立派な建物に收容されたのですが、校舎の中は荒らされて暖房器具（スチーム）も壊されていました。ガラーンとしたコンクリートの床に畳が敷かれ親子5人抱き合って寝ました。一番嬉しかったのはソ連兵が強奪に来なかった事でした。

しかし、お金もなく飢えと寒さで、ハルピンでも幼い子どもがどんどん死んでいきました。ハルピンでの死者188名です。

昨日まで話をしていた人が、朝起きて来ないので、起しに行くと死んでいたということが日常でした。飢餓と寒さで寝ると死ぬのです。

一緒に行動し遊んでいた田中啓介君が死んだときはショックで一日中ボーッとして、いつ自分は死ぬんやと子どもながらに考えました。

親同士も仲のよかった一年上の渡辺洋子ちゃんもあっけなく死んで<sup>しま</sup>了い。一晩死体安置所で通夜をしましたが、寒かったのは覚えています、ちっとも恐ろしいという思いはありませんでした。

渡辺さんは小母さんも死に姉さんも亡くなり、小父さん1人で帰国され土佐の故郷で過ごしておられましたが、大阪万博の時は、なんとうちの裏庭にプレハブ小屋を建てて、ほぼ毎日のように宝塚から吹田まで通われ、全テーマ館を見るということをして、渡辺義度さんが逝<sup>い</sup>った時家では、今頃洋子ちゃんに万博の話をするとしてはるのんやッと言ったものでした。

わたしの母は30代で父に頼まれて、一年間<sup>さんぽ</sup>産婆※学校に通いその資格を採って渡満しました。開拓団で105人の子どもを取り上げたのに誰一人その児たちは帰国しなかったことを死ぬまで歎いておりました。

さてハルピンは收容所に閉じ込められず、安達より治安もよく、自由に戸外で遊びました。冬の戸外はスケートですが、スケート靴を父が手に入れてくれたが、リンクは日本人不可。仕方ないので靴からスケートをはずして、板にうちつけて<sup>そり</sup>橇をつくり、大通りが凍結しており、馬橇の通らない時に坂を滑り下りたりして、友達と交代しながら遊びました。

元気な子どもは、大福餅やうぐいす餅などの行商を手伝い、大人の人よりも同情してよく買ってくれました。そのお駄賃<sup>だちん</sup>の大福のうまかったことは一生忘れません。

また父について白系ロシア人<sup>\*</sup>の家に薪割りの手伝いに行くと、子どもは可愛がってくれて、暖房のきいた部屋でロシアの油っこい料理ペロシキやボルシチを食べさせてもらい、こんな旨い<sup>うまい</sup>ものがあるのかと驚いたことでした。

ロシア人の字を書いているのを見ていたら、ノートを少し傾にしていたので下から上へと書いているのに驚きましたので、帰りに父に、ロシア人は日本人と反対に字を書くのかと話したことを覚えています。

母の買出しに、マジヤコーから道街まで1里の道を毎日護衛<sup>?</sup>としてついて行きました。いろいろの品物を仕入れて橋を引いて帰るのですが、往きに橋の上から凍った川の上に男の人が倒れていましたが、知らぬ顔して渡り、帰りを見るとなんと服を脱がされて裸になって死んでいたのです。

春先に首が回らなくなり、呼ばれても振り向けない、そのうちにものを拾うのに腰も曲らなくなり、痛みは何もないが、おかしいので診療所で診てもらうと、結核性脊椎カリエスと診断されました。食糧難の中、栄養を攝<sup>と</sup>らねばならず、両親や姉たち家族全員で懸命に看護してもらい、一命を取り留めました。

発疹チブスでも生き残ったのに脊椎カリエスで死んでなるものかと自分にも言い聞かせ、偏食せずに栄養になるものなんでも食べました。

背中にギプスをしなかったのは産婆の母に知識があったお陰で、毎日日光浴をして療養したので、背骨が曲らずにすんだのです。

父が日本人会から世界名作全集を手に入れてきてくれ、何度も何度も読んで覚えてしまうほどでした。病は気から、普通に歩けなかったぐらい弱っていたのに、うそのように立ち上がったのは、“日本に帰れる”という報<sup>しら</sup>せを受けたからです。帰りは病院船かなど心配をかけていたのに、歩行訓練までして、皆さんと一緒に帰れました。ハルピンを出発して間もなく松花江の鉄橋が爆破されて汽車が通れないので歩いて江岸まで行くと、今まで撃ち合っていた国民政府軍と八路軍<sup>\*</sup>（共産軍）が撃ちあいを中止して対岸へモーターボートで輸送してわたしたち一団が汽車に乗り汽笛の音また銃声が聞こえたのも、何かのんびりした戦争をしてるんやなーと子どもでも不思議に思ったことでした。

汽車が広野の真ん中で止って動かないと、必ず何か要求してくるのです。お金や石鹸など取り上げるのです。ハルピンから長春で2泊してまた汽車で南下していきます。胡蘆島という港で10日も待たされていました。

子どもたちは好奇心旺盛で万里の長城の一番東端の海のつき出ている城壁まで一日かけて見に行ったりしました。それと北満になかったさつまいもの久しぶりということもあってうまかったことも忘れません。

アメリカの貨物船リバティーにやっと乗船。船底からカイコ棚のような長い木のベッドが何段にも重ねられて、押し込められました。

海はよく揺れて大人の方が船酔いがひどいのに、子どもはケロッとしており、大釜で炊くご飯の釜にへばりついたコゲをもらうのが楽しみでした。

2日目に船で死んだ人の水葬という儀式があり、甲板にあつまり船尾から油紙に包まれた遺体を海中に落とし汽笛を鳴らして一周して祈るのです。

3日目朝鮮半島を右に見て玄界灘へ。翌朝早く甲板は一杯の人でしたが、「日本が見えたぞー」の声に大歓声が上がりました。博多湾の島々も松の緑が美しく、船首にいて飛び魚が銀色に光る羽根をはためかせて飛んでいるのをあかず眺めました。あぁ一死ななくてよかったとつくづく思いました。

ところが、検疫でコレラの保菌者が出て、当人は病院送りで上陸するのに、わたしたちは3週間の上陸止めを食らったのです。

21日間みんな毎日食べ物は少なく乾パンが10～15個くらい配給があり、カードをつくっておいちょかぶをして、本気で取り合いをしたのです。父がアメリカ軍の缶詰の函<sup>はこ</sup>を利用して、百人一首を手作りでつくりました。本もなにもないのに百首全部覚えていたのです。その上どこで手に入れたのか、取り札は墨文字でした。毎日演芸会を開いて、芸達者な人がこんなにいるのかと思うほど、浪花節・民謡・落語・舞踊・歌謡曲・特に股旅<sup>またたび</sup>ものが大受けでした。

いよいよ検疫も保菌者もなく10月10日博多に上陸した。待ち受けていたのがDDT、頭から真っ白な粉を浴びて、眉も睫<sup>まつげ</sup>も真白化<sup>ゲ</sup>で、お互いを見て大笑いしたものでした。

翌日10月11日客車でヒロシマへ。母の姉妹が住んでいたのです。広島駅において固唾<sup>かたず</sup>をのむ光景は今も目に焼きついています。

駅のホームから宇品港<sup>さへぎ</sup>が遮<sup>さへぎ</sup>るもののない焼野原から見えたこと。市電に乗って己斐に行く途中、川にかかっている橋の欄干が吹き飛んでなかったのが、爆風のものすごさがわかった。従兄自慢の福屋百貨店が丸焦げで傾いていました。

いとこの範<sup>くり</sup>ちゃんが行方不明のまま、母の姉文姉<sup>ふみ</sup>さんは爆心に背を向けて新聞を読んでいた1800m地点で首からお尻まで大火傷で、うつ伏せに寝ていました。従兄の豊<sup>ゆたか</sup>ちゃんは広島駅前で爆心から1800mだったが、市電が満員なので待っていて、建物の陰で火傷も怪我もしなかったのに、15年後歯茎から血が出て止らず、髪の毛がバサバサと抜け落ちた原爆症だったのです。

戦後の大変な生活を書き綴ると長くなりますので、これで筆を擱<sup>お</sup>きますが、この体験から、戦争はいやだ！と心から思い、実体験を書き、多くの若い皆さんに読んでいただきたいと思って綴りました。

五月のハルピン (国民学校5年生)

氷が解けて  
一度に春がやってくる  
小鳥がさえずり  
人々が動く  
花も咲き出す  
パカパカパカと馬車<sup>マーチョ</sup>が走る  
ニレの若芽の並木道  
ガラゴロゴロと牛乳屋さん  
チューリン・チューリン  
マジヤコウと  
馬車<sup>マーチョ</sup>の馭者が客を呼ぶ  
五月の風もはずんでる

河の氷も一度に消えた  
中央寺院の鐘の音も  
春を告げるかのように鳴る  
ヤナギの若芽もゆれている  
陽気な五月 ハルピンの街





## 戦争体験記

藤井 侑

私は別紙家族一覧表にあるごとく8人兄弟の末っ子として生まれ、敗戦時国民学校<sup>※</sup>三年生でしたが、大正生まれの兄弟のおかげで同世代の人よりも戦争体験について年齢の割には詳しく知ることが出来ました。その上長姉の主人（義兄大正3生）が兵役免除丁種で、大阪陸軍造兵廠<sup>※</sup>に徴用<sup>※</sup>で3年間勤務。その間の日記を戦後出版、この日記をもとに我々家族関連の記事を比較的正確に記することが可能となりました。

この体験記を書く事により、今は亡き義兄の意図した戦争反対に少しでも寄与出来れば喜んでくれる事と思います。

昭和19年12月 義兄が徴用勤務を休み、我が家の防空壕作りに来てくれる。二人の兄は既に出兵しており義兄に依頼することになり、家の小さな庭を50cm程掘るとすぐに息が上がってしまい細い木で杭を打ち屋根を組み立て、ほとんど盛土で済ませていた。幸い今回の空襲は焼夷弾<sup>※</sup>であったので助かったが、これが爆弾であれば爆風で吹き飛ばされ離れていても一屯爆弾の様な大型であればその衝撃で盛土が埋没し助からなかったと思います。当時30歳の義兄がいかに兵役免除の虚弱体質（戦時中は非国民と軽蔑されていた）であったか理解して頂けたと思います。

当時集団疎開<sup>※</sup>は3年生からであったが2年生の後半奈良へ一泊の予行演習があり当日の朝早く起こされ朝に代用食の南瓜を食べお腹をこわし奈良に行っている間ずっと下痢で困り今でも南瓜を見ると70年経った今でもそのことを思い出します。

出発の朝奉安殿<sup>※</sup>に恭<sup>うやうや</sup>しく一礼天皇皇后両陛下の御真影<sup>※</sup>を出してこられた校長先生がそれだけを背負われ父母の前で「只今より行って参ります」と挨拶されていました。今の北朝鮮で将軍さまと崇めているのをテレビで見て当時と全く同じ状況であったと感じました。

昭和20年3月13日大阪大空襲 11:30PMからB29約90機 大阪市南方天王寺西方に焼夷弾投下約3時間攻撃 3:30AM頃空襲警報解除となったがその間南の空が火災を雲に映して赤く焼け焦げ暫<sup>しばら</sup>くして雨がぽつぽつと降り出し、やがて次第に激しくなり戦災を免れた我が家の布団に入ってから焼夷弾で焼けた家の壁などがバタンバタンと倒れる音がずっと続き興奮状態でなかなか寝付かれなかった。

当時の自宅は天王寺隣接の生野区林寺にある2階建ての住宅。

この空襲を機に危機感が深まり急遽<sup>きゅうきょ</sup>、母の実家の田舎（広島県東城町）に縁故疎開することを決め母の下の子に荷造りのため大阪にきてもらい家財を国鉄の貨物便で送付。転居の

日玄関から二階を見て、「これが最後だからよく見ておくよう」母から言われた事を今でも鮮明に覚えています。

昭和20年4月1日広島県東城町へ縁故疎開（母47歳、次姉18歳4女11歳小生8歳計4名）。当時大阪大空襲の後なので疎開者が多く、当日列車は満員。小学2年の小生汽車の窓から乗せられた記憶があります。当時はまだ蒸気機関車で夜出発し翌日昼間もかなり走り相当時間を要したと思います。

母の実家は山深い兼業農家、叔父（農協勤務・妻と子ども4人）の斡旋で町の大きな造り酒屋の倉庫2階にある茶室（2帖・4.5帖）を借りてもらいました。

そこでは電気はありましたが、水道、ガス、トイレ、風呂もなく、50m以上離れた造り酒屋の施設を借りて済ませていました。水は酒造に使う湧き水の大きな井戸で、水質は良かったのですが毎日の水汲みが大変でした。風呂は残り湯を利用させてもらいましたが、五右衛門風呂なので入る時に、蓋を踏みしめて底とするのは子どもには難しく失敗して熱い思いを何度もしました。トイレは冬場雪が多く危険なので夜間は倉庫の階段の下にバケツを置きそれで済ませていました。

母や二人の姉たちには大変に辛い事だったと思います。

煮炊き物は倉庫の前か、雨の日は中で済ませていました。大阪に戻るまで約9ヶ月間、ここで過ごしましたが不便さよりも毎晩の空襲のない日を過ごせたのでまったく苦になりませんでした。

お米の配給は一日一人当たり2合3勺<sup>ごう しやく</sup>ありましたが、当時の副食は漬物と梅干のみ、従って朝ご飯を炊き、昼の弁当を軽く入れて（アルミ弁当）残りを、雑炊かお粥にして食べていました。この弁当もカバンに横にして入れて行くので弁当箱の半分くらいに減っていました。

縁故疎開先の国民学校にも集団疎開の児童が村のお寺に宿泊し、1クラス数人ずつ配属されていた。午前の授業時間終了後、その子達には弁当はなく一斉に廊下に出て我々の食事が終わるまで待っていました。したがって、この子達は一見してすぐ判別できました（我々も栄養不良でしたがこの子達はさらに青白い顔をしていた）。

そして、一日の中で唯一ご飯で食べられる昼の弁当が盗まれる事が時折あり戦々恐々としていたものです。当時学校のトイレも全部汲み取り式で月一回業者が来たときにアルミの弁当箱が回収されたので、盗んだ弁当をトイレで食べ捨てていたことが後でわかりました。この様に集団疎開でも関係者が米をピンハネしていたこともあったと聞いております。戦争はこの様に、いつも弱い者に皺寄せ<sup>しわよ</sup>が来るよい例です。

8月6日、広島市に原爆が投下され市内に入隊されていた造り酒屋の主人が亡くなられ、当時はB29より投下された爆弾一発で広島全市壊滅の噂。その葬儀で小生の1年下の跡

取息子（よく一緒に遊んでいた）が黒い額縁に入った父の写真を持って悲しみにくれていたのを今でも思い出します。

また、疎開先での夏の宿題は紅葉の葉を集め乾燥して一貫目を休み明けの9月1日大きな袋に入れて提出した記憶があります。紅葉の葉はすぐ裏の山に登り大勢で集めました。小生には慣れない作業で早速毛虫に刺され痛い目に遭いましたが地元の子のアドバイスで小便をかけて治療としました。5、6年の上級生は松の木の根っ子を掘り出し提出していました。これは飛行機の燃料になるとのことでした。

暫くして紅葉の葉を粉末にした硬い乾パンを代用食として貰った記憶があります。

町の散髪屋でシラクモという皮膚病にかかったことがあります。当時消毒薬は無く、米の糠を燻した臭く黒くどろっとしたペースト状の粘液を、患部に塗っていたが、そんな物で治る筈がなく、見事な直径3センチの円形脱毛となり長い間そのままでしたが、今でもその芯が小さな瘤のように残っています。

この戦争体験記を書いて気がついたことは、わたくしの77年の人生の中で戦時中はたったの8年でしたが自分史の中の重要なウェイトを占め、その後の人生に大きな影響を及ぼしたと考えられます。

即ち、小生誕生のS、12年に日中戦争\*勃発、S、16年に太平洋戦争勃発により、長兄出兵。S、18年小生国民学校入学 S、19年次兄出兵。次姉、学校報国隊\*で勤労奉仕。国民学校入学と同時に幼少ながら軍国少年として教育され、B29爆撃機による空襲に堪えきれず、縁故疎開で広島へ、疎開先での9ヶ月間の不便な生活、敗戦後大阪に戻り焼野原から出発の生活、兄たちの闇商売を小学生の時から手伝いながら成人しました。生まれてこのかた、戦時体制下に育ち、「欲しがりません勝つまでは」の合言葉で飢えと寒さの耐乏生活が当たり前の中で育ちましたのでそんなに苦労したと思いませんでした。

現在、私は年金生活者ですが戦時・戦後当時のことを考えると毎日の生活は極楽です。毎日、感謝、感謝です。こんなに平和で自由で健康生活を送れる国は日本だけだと思います。現に、世界有数の長寿国であることがそれを証明しています。

今集団的自衛権賛否両論国会で議論されていますが、殆んど政治家が戦争の怖さを知らない戦後の教育を受けた75歳以下の人であり、この成り行きが心配です。

一旦、戦争に捲き込まれると、どんな悲惨なことになるか今の贅沢三昧な生活を送ってきた人々には想像できないと思います。私の様に生まれた時から耐乏生活に慣れた者でも大変でした。この戦争体験記を書いて、更に戦争絶対反対の決意が強くなりました。また、この体験記を読まれた方が、一人でも多く戦争絶対反対の声を挙げて頂ければ幸いです。

## 参考資料

## 敗戦時の家族一覧表

			敗戦時	戦時中
父	藤井 博	明22, 4, 1生	昭13, 8, 31	死去(49歳)
母	藤井 すへ	明30, 7, 15生	48歳	
義兄	竹鼻 信三	大 3, 8, 10	31	大阪陸軍造兵廠に勤務
長女	〃 房子	大 7, 10, 31	26	
長男	藤井 一夫	大 9, 11, 8	24	満州牡丹江(出兵)
次男	〃 公二	大13, 11, 1	21	信太山聯隊(出兵)
次女	〃 静子	大15, 8, 5	19	武田薬品へ(学校報国隊)
三女	〃 泰子	昭 4, 7, 7	昭8, 4, 22	死去(3歳)
三男	〃 節雄	昭 7, 2, 4	昭8, 4, 24	死去(1歳)
四女	〃 明子	昭 9, 1, 23	11歳	東城国民学校6年生
四男	〃 侑	昭12, 2, 23	8	〃 3年生

## 支那事変当時の夫の従軍写真

堀江 ヨシ子

堀江ヨシ子さんの夫、堀江一郎さん（明治 44 年生まれ）が支那事変<sup>\*</sup>に従軍した当時の中国での写真です。平和を願って寄せられました。

数多くの写真の中から一部を掲載させていただきました。



騎乗の堀江さん



堀江さんと中国の少年



上海黄浦江の戦火



当時の戦車（?）





上海における陸戦隊



李宅での明治節の記念写真



上海日本人町入口



破壊された上海呉淞砲台



兵士の写真

## 終戦 七十余年を刻みて

前澤 圭佐

「欲しがりません 勝つ迄は！！」  
「耐えがたきを耐え 忍びがたきを忍び！！」

今年も第二次大戦 終止符を打ち空しい八月が巡り来た。

蝸<sup>ひぐらし</sup>の騒がしい暑い夏の日中だった。

昭和の年号も刻みて六十四年 年号平成に替り二十六年 昭和 大戦の二十年を差引き七十一年の歳月が流れて「今」がある。国民一人一人の血と汗が流れ先輩の犠牲の上に我が国の姿がある。

今後の若い人達に方向として少しでも役立てばと考え、一部分ですが戦中暗かった事を綴り、今後の平和な事、善き指針として方向付け願えればと考えます。

私は今年（平成26年）八十歳で 九月末で満八十一歳と成ります。

小学校は（国民学校<sup>\*</sup>）西宮中心部に現在も残っております Y国民小学校で六年間学びました。

「男・女7才にして席同じゅうせず」の世代でした。服装は女子は頭に防空ずきん<sup>\*</sup>、服はモンペ姿、男子は粗末な国民服<sup>\*</sup>に高学年になると足にゲートル<sup>\*</sup>を巻き、継ぎはぎの多い制服だった。

運動場の一角に「奉安殿<sup>\*</sup>」が祭られ「教育勅語<sup>\*</sup>」巻物が保管されて、全校生登校終り朝礼時全校生運動場に整列し、校長より教育に関する訓話が話され、一日の教育のスタートであった。

「奉安殿」の周りは「玉砂利」が四隅に敷きつめられ白黒の小石であった。又、「奉安殿」は乱り<sup>みだ</sup>に入ってはならず「勅語」の保管庫であった。

国民の生活は、自由に手に入る物はなく配給制度で「米」中心に一日一人当り米一合五勺<sup>ごうしやく</sup>とか、砂糖、食塩等も統制品となり自由に手に入らなかった。甘味類はズルチン サッカリン等、時折配給等で手に入っても苦く身体に良くない化学甘味料であった。

生活用品 鍋、釜、はき物 靴 衣類等々配給制で、暗い世相だった。

商店街の一角で四、五人の婦人が白地の晒<sup>さらし</sup>木綿に赤糸で縫い止めて「千人針<sup>\*</sup>に協力ください」と声を出しておられた。千人針完成しますと 出征兵の自宅へ届け お守りと激励でもって寄贈されていた。

又、各家庭の出入口の隅に防火用水の樽<sup>たる</sup>や桶<sup>おけ</sup>に水が貯められ、夏は蚊の発生源となった（ボウフラ）

又 各家庭の窓は空襲で、ガラス飛び散り被害防止の為、ガラス窓に新聞等を細長く切り貼り、ガラス窓への爆風で怪我せぬ様危険対策を工夫していた。

その他 学童集団疎開（縁故疎開）の話等ありますが、又の機会に譲ります。

## 祖国愛に燃え 命知らずの少年時代

宮川 末治郎

### 一、戦時中

♪勝って来るぞと勇ましく  
誓って故郷を出たからは  
手柄立てずに死なりようか  
♪東洋平和のためならば  
何んで命が惜しかろう

(一) 昭和18年、大東亜戦\*の真っ只中京都府北部丹後半島の片田舎（旧養老村現宮津市）

大きなのぼり旗を立て一人一人が日の丸の小旗を振り、軍歌を歌いながら峠まで出征兵士を見送る、いつもの光景である。

国防婦人会の見送り



出征兵士を送る

先月は一人、今月もまた・・・緑の谷間には30数軒の村落があり、青年殆どが紡績工場（丹後ちりめん）に働きに出かけており、若者達は兵隊検査を受け甲（乙）種に合格したら召集令状\*を待っていた。兄二人（三男四男）が続けて出征する晴れ姿を見て、

自分も軍人になろうと心に決め、学校の先生からいろいろ話しを聞いた。

少年戦車兵・航空兵・軍用船員など受験できることを知った。

郵便局に勤めていた父に、少年警察官の一次試験を受けるよう説得され、京都市の警察本部で受験した。14歳のときだった。

母は兄二人が出征した後、長男は公務員で役場の兵役係。農業に男手が必要で、私には農業をさせると云い張っていた。

家の裏山からは遠くに舞鶴湾の入口が見え、軍港に出入する軍艦の雄姿を眺めて海軍の軍人に憧れていた。

配属科校から激励の訓示を受ける  
(校庭)



(二) 昭和19年4月、大阪府岸和田市にある官立海員養成所の入所試験を自ら受け、軍用船員になることを決めた。

養成所は岸和田市のほか愛媛県の高浜・山口県の門司の三ヶ所にそれぞれ設置されており、「<sup>ていしんしょう</sup>逋信省\*管轄下」におかれ将来海軍下士官になることができるとあった。

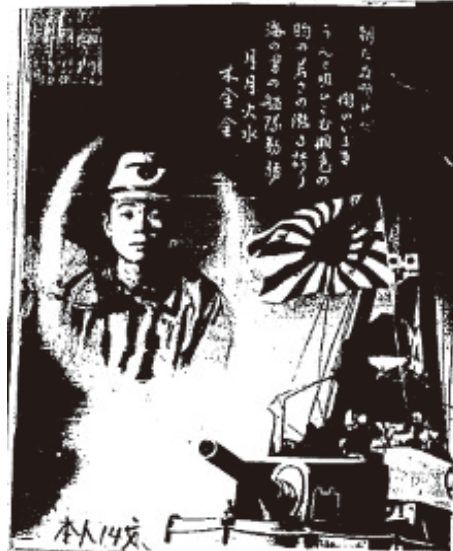
養成所教育科目は船舶概要・通信・簡単な英語・軍事教練が主であった。

卒業後軍用船に見習い甲板員として日本の各港～朝鮮の釜山港間を往復し、軍人・馬・大砲等を満載して、本船は輸送を続けた。

釜山港に入港して間もなく、<sup>くに</sup>故郷の父から、京都府少年警察官の試験に「合格した」と電報が入ったが、身動きがとれず止むなく

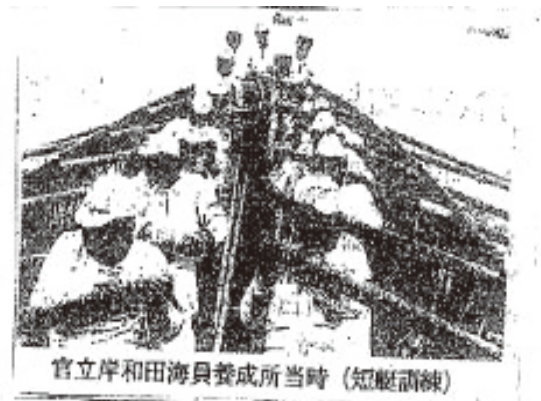
引きつづき軍用船員として勤務することになった。

優等生として受賞記念写真  
(教官室にて)



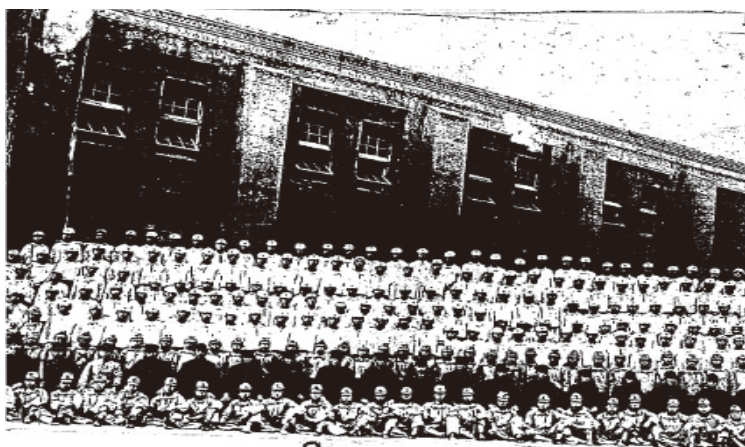
(三) 軍用船には対空機関砲が装備され、海軍軍人が戦闘員として乗船していた。釜山港に停泊中本船が米軍戦闘機（ロッキードP）数機の攻撃を受け、機関砲手が眼前で倒れたが、隊長の「撃て・撃て」の号令で、二番砲手が交代して応戦したが、弾薬の補給が续かず、私が仮弾薬手として階下から手渡して砲手に渡したが米軍機の急降下音と本船の機関砲の発射音が交錯・

一心不乱・無我夢中の行動は当時は当たり前。今思えば恐ろしい状況だったと回顧しています。





(四) 昭和 20 年早々、私の  
 軍用船は南方作戦の  
 大輸送船団（軍用船  
 10 数隻・護衛艦・航  
 空機）に編組され門司  
 港を出航した。  
 乗船員は「神潮」の鉢  
 巻をして気を引き締  
 め、船橋に立って全員  
 が双眼鏡により見張  
 りを続けた。



官立岸和田海員養成所（5、6、7期生）全生徒



乗船した明海丸

鹿兒島沖を南下中本船がエンジントラブルを起  
 しスピードが出せず、止むなく軍人や満載の積載  
 物を予備船に移し替え、点検修理のため呉港に入  
 った。

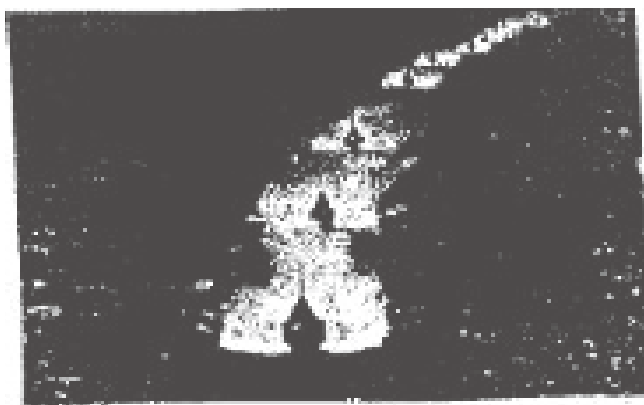
一方南方に移動中の大輸送船団は途中米軍機に  
 発見され猛攻を受け、任務を完遂することなく殆  
 どが撃沈されたと聞かされた。

同郷の養成所同期生 2 名<sup>ゆうやくそうと</sup>勇躍<sup>かつあい</sup>壮途<sup>か</sup>についたが実状を割愛し合掌。  
 修理を終えた本船は繰り返し輸送任務についた。

神戸港に停泊中、米軍爆撃機（B-29）の神戸地区への大空襲を受け、本船上に  
 焼夷弾<sup>\*</sup>が落下したが、木造家屋を対象とした焼夷弾では本船には通用せず、容易  
 に消火することが出来た。

阪神地区への米軍機の空襲  
 経路は四国上空から飛来し、  
 西風を利用して神戸市西方  
 から焼夷弾を投下するじゅ  
 うたん爆撃だった。

神戸市街は一面の焼野原と  
 なり、空襲警報のサイレン  
 は山手からの吹鳴のみで、  
 かすかに聞こえる程度だっ  
 た。町に上陸して<sup>きんたん</sup>惨憺<sup>た</sup>たる  
 状況に<sup>ただぼうぜん</sup>只<sup>きんたん</sup>呆然。戦争の恐ろ  
 しさをまざまざと見せつけられた。



南下中の船団



米軍機は高々度のため日本軍の高射砲※では全く届かず、撃墜は不可能だった。そこで日本軍は四国の高峰石鎚山（1982m？）に高射砲を配備して迎撃した。その射撃によるものか、詳細は不明だが、神戸上空で米軍爆撃機一機がプロペラ4発をゆっくり回しながら海上に墜落するのを私はこの目で見た。米軍の飛行兵がパラシュートで脱出し、造船所付近で確保された。米軍機は神戸沖の海中に没するまで、日本軍の地上からの猛烈な射撃を受け、弾丸が糸を引いて命中するのを肉眼で見ることが出来た。



## 二、 終戦

昭和20年8月15日、釜山港の軍用船内放送で玉音放送※を聞いた。雑音がひどく内容は全く判らなかったが、後で太平洋戦争の終結を知らされた。

本船は引揚げ船として任務に付く事となり、復員軍人・釜山港の倉庫にあった米・麦等満載して帰国の途についたが、

故国を眼前にして山口県沖数キロのところで米軍の投下していた浮遊機雷に触れ爆発、本船の中央部が破壊され沈没した。

海岸に向って泳いでいるところを近くの漁船に救助され、農家にお世話になった。

当時の救命道具（衣）は竹製で、乗船していた復員軍人・一般引揚者など、救命具は数少なく殆ど利用できず、多くの犠牲者が出たと、農家の人から聞いた。

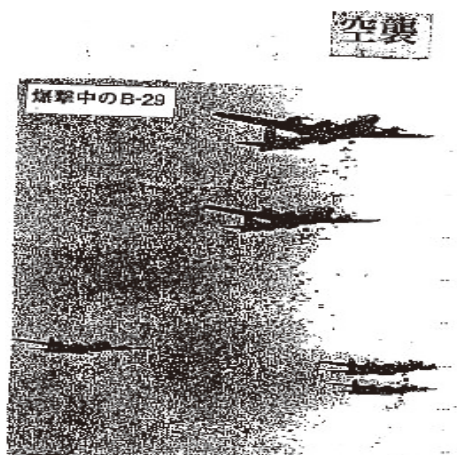
二日後、着の身着のまま山陰線屋根なしの貨物列車で排煙を顔に直接受け、顔は真黒。故郷宮津市の実家についたのが10月末だった。

年末に神戸の本社から遭難手当として二千元（当時の額としては農家では高額）を受け取った。

父は早速水田を買い、母は初めて親孝行してくれたと涙して喜んでくれた。

神戸上空墜落寸前の米軍機





### 三、 終わりに

戦争は終わった・・・と実感したのは、ビルマ・フィリピンで戦死した兄二人の位牌の前で線香を立て手を合わせたときだった。

あれから約70年、日本の国が「勝つ」と信じて戦った太平洋戦争。三年八ヵ月 1365 日の間第一線の将兵は死闘を繰り広げ、銃後では国防婦人会\*の皆さんを先頭に老若男女毎日近くの神社に必勝祈願。只ひたすら国の為にやり抜いた尊い心。お互い素晴らしい姿だったと思う。



二度と起こしてはならない痛ましい戦争。

全国の皆さんと共に、世界平和が永久に続くことを祈念してこの記録を終わります。



## 私の戦争体験記

室伏 尚美

昭和20年8月15日は、暑い日でした。

玉音放送<sup>ぎょくおん</sup>\*が始まるというので、家族全員でラジオの前にいた。ガーガー、ピーピーという雑音がうるさかった。

「堪へ難キヲ堪へ忍ビ難キヲ忍ビ　以テ万世ノ為ニ太平ヲ開カムト欲ス」

昭和天皇が、太平洋戦争の終りを告げた。終戦の詔書<sup>しやうしよ</sup>であった。私の家族、隣近所の人、たぶん日本中の人々がこの放送を聞いていたことでしょう。

この放送が終わった時、隣の私よりひとつ年上の小学校1年のお兄ちゃんが遊びにきたので、家の前の道路で、字を書き遊んだ。この道路はいつも人通りがあるが、今日は人通りがピタッと止っていたので、二人で道路いっぱい字を書き遊んだ。

私の故郷は、静岡県の富士山のふもと、静岡県駿東郡小山町です。神奈川県、山梨県の三県に県境を接する町です。

アメリカ軍は、富士山を目印に飛行機が飛んで来る。親兄弟も、隣近所の人も皆そう言っていた。だから空を見上げると、B29が1日に何回も飛んで来て、どこかへ行ってしまふ。子ども心に、なんとなく不気味で恐ろしかった。私の町は、富士山の伏流水が豊富であったので、関東配電（今の東京電力）の水力発電所が何箇所もあり、富士紡績が第一工場から第五工場までありました。これらの大きな建物は、アメリカ軍に狙われる<sup>ねら</sup>というので、草色とか、黒とか、土色に塗られていた。私は早く普通のきれいな色にもどらないかと、いつも思っていた。私の家も隣近所の家も、焼夷弾<sup>ねら</sup>\*で三ヶ所穴があいた。父と兄が屋根に登って直していると、また焼夷弾が近くの畑に落ちた。実際にそのタマを見てこわくなった。空襲警報のサイレンが鳴ると、隣近所の人は一斉に防空壕に逃げ込む。家から坂道で300mぐらいの距離があった。何十回、この防空壕に逃げ込んだのだろう。自分で歩いたというより、父か兄にオンブしてもらった記憶の方が多い。何しろサイレンが鳴ると、全員一目散に防空壕に殺到するので、モタモタは出来ない。小さい子どもは大人がオンブすることになる。何しろ食べ物をあまり食べてないので、足がフラフラする子どもがほとんどであった。

B29、焼夷弾、防空壕、停電、空腹、戦争中の一番辛い恐ろしい事であった。戦争が終わって、マッカーサーが日本に降り立った写真を見た時、ああ何とカッコいいんだ、この人達と日本は戦ったんだと思うと、無謀<sup>むぼう</sup>な事をしたもんだと思った。

富士山を目印にB29が飛んできたというのは本当だと実感し、納得したことがあります。うちの町の国道を何百台も、ジープ、戦車が富士山の東富士にベースキャンプを作ったのです。

私は母の実家の伯父さんと馬力<sup>ばりき</sup>\*で町に出かけたのです。そのときのその光景が、今だに目



に焼きついています。アメリカ軍のジープ、戦車の上には、全車輻、拳銃をかまえているのです。伯父さんは私にポケットに手を入れるな、入るとポケットに何か隠していると思なして、拳銃で撃ってくるぞと。私は殺されたらたまらないと思い、直立不動で、1時間以上、ジープ、戦車を見送っていました。

終戦70年たって思う事は、余りにも戦争のことは知らなかった事に驚きました。

対馬丸撃沈事件<sup>つしま丸</sup>※は、今年（平成26年）両陛下が、沖縄県を訪問され供花されました。私がこの対馬丸事件を知ったのは、小学生の孫が、学校の行事で、音楽会をやるので見に行きました。この時、対馬丸をミュージカルとして発表していたのを見て、沖縄から長崎へ疎開<sup>そくかん</sup>※するために対馬丸で事件にあったことを知りました。

ポツダム宣言<sup>ポツダム</sup>※をめぐっては、そもそも7月末にこれを突きつけられたが、戦争指導者たちは、黙殺を決めこんだ。新聞は「笑止！」などと強がった。ところが連合国側は、「拒絶」と解釈し、あの8月の悪夢がもたらされた。広島<sup>ひろしま</sup>の6日、長崎の9日の惨禍も、13日に長野市、14日に大阪市や山口県岩国市、光市、そして15日未明まで、埼玉県熊谷市、秋田市の土崎港周辺には爆弾が降り注いだ。日経新聞春秋の記事で初めて知りました。

私は数年前、カナダ旅行に行きました。国土も広く素晴らしい国でした。世界遺産になっている、ケベックに行きました。そして、ホテル「シャトーフロントナック」で昼食をとりました。エリザベス女王も訪れている、有名なホテルです。このホテルで、アメリカのルーズベルト大統領、イギリスのチャーチル首相が会談をしていたのです。ポツダム宣言の下準備の会談だったようです。ところが、イギリスのチャーチル首相は、不治の病と言われた、結核にかかっていたそうです。世界の医学は青カビからペニシリンを発見しました。この薬の恩恵で、結核を克服できたのです。日本では、戦前・戦争中・戦後、この結核が死亡率No.1だったのです。この結核で亡くなった人々を思うと、この戦争の無謀と恐ろしさを感じずにはいられません。

戦争はなぜ起きるのか。紀元前、人類が生れた時から、今まで、歴史を見てみると、戦争が起きていない時と起きている時、どちらが多いのか少ないのか、答えに窮<sup>きゆう</sup>するしだいです。

アンパンマンの作者、やなせたかしさんの著書を読んでいたら、アンパンマンの正義のキャラクター、正義の味方は、2,000以上あると言っています。正義を言っていたら、万人<sup>ばんにん</sup>の正義があると言うのです。

宝塚市が「平和の鐘」を末広中央公園に設置しました。広島市から被爆アオギリ、長崎市から被爆クスノキが、それぞれ植えられています。この平和祈念ゾーンを見てきました。広島原爆記念公園には、「過ちは繰り返しませぬ」の石碑があります。新聞の川柳に能弁総理「軽い口重い命と平和述べ」とありました。あのヒトラーも声高に、平和・平和を連呼した。現在宇宙には3,500の人口衛星が活躍している。この数が多いのか、少ないのか、歴史が判断することでしょう。

ゴーギャンがタヒチで描いた大作

我々はどこから来たのか。

我々は何者か。

我々はどこへ行くのか。

すべての人間にとって最大のテーマである。

日本人の最大の資産は、誠意、寛容、潔さを備えた日本人だと思う。





## 戦争体験記

八尾 幸次郎

戦中・戦後の体験を、断片的に記憶を思い出しつつ、又両親から聞いた体験記も併せて記します。

私の家は栄町1丁目。我家の庭に防空壕が（4～5人程入れます）掘っており、隣との家の間（2m×4m・深さ1m余り）にも、近くの下水管（丸い直径1m余り）に、近隣の方々と入った覚えがあります。私も幼児でしたので、何の為に防空壕に入る意味が理解出来ず、母を困らせたように思います。

昭和十九年頃、空襲が頻繁になると言う事で、能勢妙見の親戚に大切な家具・衣類・書類等をトラックで運びました。丁度引越の時が秋で、食糧難の時代、新鮮な野菜・柿等を食べた良い思い出があります。

現在、宝塚動物霊園のある場所に、監視所があり、監視員が二十四時間双眼鏡で敵機来襲に備え、襲来時にはサイレンを鳴らし、小浜村、良元村の村民に空襲警報を発令していました。夜間は電燈の笠の周りに、黒い布で囲って明かりが漏れない様にしていました。昭和十九年頃、ある日母が『今日は客間に、兵隊さんが二人来てはるから、行ってはダメ』と言われました。兵隊さんは、長いサーベル<sup>\*</sup>を持っていました。私は今、宝塚市史を勉強（研究）して判った事は、昭和十八年から終戦にかけて宝塚大劇場を閉鎖し、宝塚海軍航空隊が大劇場の総ての施設を訓練場として、接收<sup>\*</sup>していました。その時の将校が休暇の際、近隣の民家が受け入れていた事が判明しました。

花の道は、武庫川の堤防である事を、皆さんご存知ですか。小林一三像の前の広場は、当時宝塚海軍航空隊が物資を搬入するのに、車両の出入りをスムーズにするため、無許可で削り取ったと、言い伝えられています。

### 戦中・戦後の食糧難

家の周りの総ての空地は、芋畑です。我家は八人の大家族。一番苦勞したのは母でした。配給制の時代、物資の不足、物は売っていません。母は時々、家にある物を持って国鉄に乗り、三田方面の農家に行き、物々交換でお米を仕入れて来ました。帰路国鉄宝塚駅では、警察が「闇米」の取締りをしており、生瀬で下車、大変な思いをして徒歩で帰って来ました。我々家族のためにとすると、母に感謝・感謝の気持ちで一杯です。私達の家族はまだ幸せでした。

### ◎宝塚小学校入学時（昭和二十二年）

着る服は兄弟・親戚から、靴はありません。わら草履です。一年中わら草履です。子供

達は栄養失調です。手足は霜焼けです。やっと三年生の時に、運動靴が手に入りました。生徒全員が靴を履いている訳ではありません。小学校で売店が開店。パンの販売が始まりました。菓子パン（苺ジャム入）を、初めて食べて感激した思い出があります。（その木村屋製パンは、2年前息子の代で閉店）

#### ◎シベリア・北朝鮮等の抑留者\*の帰国

第二次大戦後、国外からの引揚げ者、及び北朝鮮抑留者七万人・シベリア抑留者五十八万人の元日本兵士（約2年～10年間の抑留）が、次々と内地に帰って来ました。舞鶴から引揚列車（国鉄）が、宝塚駅の近くを通過すると、赤旗を振って迎える人、また帰国した人たちも赤旗を列車から振っていた事を、今でも鮮明に思い出します。

#### ◎赤紙\*（召集令状\*）

次々と近所の男性に召集令状が届き、隣組\*の婦人会が、阪急宝塚駅プラットホームまで、日ノ丸の小旗を振りながら、最後尾の運転席のガラス窓を下し、電車が遠ざかるまで、見送りました。見送る婦人会の方々は、「もんぺ」に「防空ずきん\*」の姿でした。その当時は戦争末期でもあり、阪急電車の運転手・車掌も女性が。現在は、運転手・車掌も女性が多く見受けられる様になり、その姿を見ると、戦争中の事を思い出します。戦後2～3年程、米軍が進駐していた時、阪急電車は、進駐軍\*及びその家族専用（一輛編成・三十分一本程度）車輛を、沿線に走らせていました。

#### ◎燃料・飲料水

戦時中、戦後も食糧難、燃料不足です。今の様に便利な都市ガス・水道はありません。各家庭の燃料は薪で、山へ柴刈に行きます。その行先は、六甲山（塩尾寺方面）、長尾山（奥之院方面）に柴刈が日常です。燃料がなければ煮炊きが出来ません。水は各家庭の井戸又は共同井戸でした。（水道・ガスは昭和二十五年頃）ですから近所の山は当時禿山<sup>はげやま</sup>でした。

#### ◎両親から聞いた戦時中の事情

現代、我々の身近には、回覧板、掲示板、ゴミ当番等が存在しています。戦時中は国民総動員というのがあり、町内会（隣組）が10戸～20戸で組織。定期的に会合が開催され、一軒から必ず出席が義務付けられました。当時のこと、主婦が中心で、組長は男性です。内容は戦時中のことで、防空壕掘り、食料の配給、消火対策、出兵者の見送りです。食料等は生活必需品は配給制ですから、家族構成、思想等まで組長が、把握を義務付けられていたそうです。隣組を利用して国策遂行を義務付ける狙い<sup>ねらい</sup>があったのでは・・・お互いに監視し、監視されていたのかもね。

私も幼児の時、こんな歌が流行していましたのを覚えています。

『とんとん とんからりと隣組、格子を開ければ顔なじみ・・・』 曲名は“向こう三軒

両隣”でしたっけ！

◎欲しがりません。勝つまでは

戦争体験のない国民は、85%程になった現在、豊かな時代に生れ、育った人達は、自分の両親に対する思いやり、心配りはあるだろうか。自分の仕事・家族の事で精一杯だろう。その様な現代、近隣国とのトラブルで戦争になったとすると、一億人余りの国民の食料・教育・医療・行政等で、今まで経験のない出来事に遭遇し、不安感で・・・大混乱。

戦争は、大人の喧嘩と同じです。一度起こると終わりが分らない。

今後日本人も、正しい日本の歴史力の向上に努め、世界中に日本国は『平和な国、おもてなしの国、信頼ある平和文化』を近隣国、世界に伝えよう。

そして、孫達に幸せな人生を願って、筆を置きます。



## 大阪大空襲

山岸 佐津子

私は昭和6年生まれ、空襲に遭ったのは14才になったばかりの時だった。

日中戦争\*から太平洋戦争まで、いちばん多感な人間形成期を悲惨な戦争の渦中で過ごした。

学校では「聖戦遂行のため、君達は命を捨てて、頑張らねばならない」と常に聞かされ、「忠君愛国」を叩き込む教育を受けた。「日本は神の国だから神風が吹いて戦争には負けることはない」と、終戦迄信じていた。教育とは恐ろしいものである。

その頃は日本軍の勝利の報道ばかりだった。

兵士が出征するたびに、国民学校\*（小学校）から日の丸の旗を振って見送った。そのうちに戦死者の「英霊」を迎える日が多くなった。

単発的に軍需工場に爆弾が落とされる日が増えてきた。避難のため各家に防空壕を掘るように決められた。

単発的だった爆撃が、3月13日は違った。大阪を狙った深夜の大量無差別爆撃である。焼夷弾\*とは、他の爆弾と違って、一発が落ちてくる途中で何発にも分かれ、火の玉が次から次へと降り注ぐ。「一発の焼夷弾が屋根に落ちたら摘んで捨てましょう」の防空訓練は全く役に立たず、惑うばかり。為すすべがないまま敵機は次から次へと来襲、火の豪雨は14日未明迄続いた。

大阪市西区汐見橋北詰に住んでいた私は、「空襲警報解除」のサイレンを家で聞いたので、もうこれ以上家は焼けないと思った。だけど消す人もなく、消防車も焼けたので、燃え放題。遠くで焼け出された人が、唯一焼けていない大正区の大正橋に向って、北から南へ逃げて行く人が多くなった。

念のため、幼い弟と母は早めに大正橋に向った。遅れて私一人、カバンに缶詰と制服・肌着を入れ、傘2本を握って、小さな体で持てるだけ持って大正橋へ行った。

どの位の時間がたったか定かではないが、14日朝、父と姉が「家が焼けてしまった」と、母・弟・私のいる大正橋へ来た。それを聞いた母はその瞬間「耳がピーン」と鳴って、それ以来耳が遠くなった。

ひとまず今の正橋（当時は貨物線の駅だった）のガード近くの親戚の家に行った。

翌日、幼い者は疎開\*しなければならず、母と弟は富田林の川西に行くので、私は天王寺駅迄歩いて送って行った。その道で焦げ茶色の焼死体を跨ぎながら行ったが、何の感情も湧かなかつた。今思えば精神が正常ではなかつた。



私の家族は無事だったが、悲惨なのは私の家から歩いて15分くらいの所、大阪市西区北堀江に住んでいた亡き夫の方だ。北堀江一帯は直撃を受け、たちまち火の海になった。

17才の夫は13才の妹の手を引いて逃げまわり、逃げる後から火のついた電柱が倒れてきて妹は足に火傷をした。

誰もが大阪の空襲は初めてなので訳が分からず、土蔵の中なら助かると思って入った。夫と妹もその蔵に「入れてくれ」と頼んだが満員で入れてもらえなかった。仕方なくまた火の中を逃げ、近くの堀江国民学校の一角で壊れた水道管の水を被り<sup>かぶ</sup>どうにか助かった。

翌朝、蔵の中の人は全員蒸し焼きになって亡くなっていた。

その周辺は死者が多くて焼くことができず、近くのあみだ池（和光寺）に死体を積み上げる状態だった。

翌朝、夫は住んでいた焼け跡に行くと、防空壕で両親が死んでいるのを見た。父の遺体だけを何とか引っぱり出し、寺へ運ぼうとするが重く、スコップでゲートル<sup>\*</sup>を巻いている父の足をちぎり、運んだ。

「その時が一番悲しかった」。この事実を夫は20年間誰にも話さなかった。

「親の体を傷つけた」と、亡くなるまで悔やんでいた。

両親と一緒に居たはずの一番下の弟は、何処か<sup>どこ</sup>か<sup>どこ</sup>で生きているのではないかと、浮浪児の中を探し回ったが見つからなかった。

その後夫は僅か<sup>わずか</sup>17才で、集団疎開をしていた小学5年生の弟を迎えに行き、妹と弟の二人を混乱の中で親代わりとして育てるといふ、言うに言えない苦勞が始まった。

それから20年。夫が空襲時住んでいた家の防空壕跡を掘ったところ、大人と子どもの骨が出てきたので、母とともに弟が亡くなっていたことが分かった。20年も経ってやっと<sup>まつ</sup>祀ることが出来たのだ。

爆弾・焼夷弾を飛行機から落とす者は、ボタンひとつ押して痛くも痒く<sup>かゆ</sup>もないが、その下では罪もない多くの人が逃げ惑っている。

私は今も、戦争をしている場面を見る度に胸が痛む。

戦争は絶対にしてはならない。

#### ※空襲時住んでいた住所

私 大阪市西区道頓堀5丁目1番地

夫 大阪市西区北堀江御池通3-12

## 千の太陽よりも明るく

山根 政則

私は広島市の中心部にある問屋街「横堀町」に昭和6年（1931年）に生れ、都心にある本川小学校を昭和19年3月に卒業をしました。その小学校は川を隔てて真正面に「産業奨励館」（後日、あの「原爆ドーム」と名称変更。）に向かい合うという、今考えると恐ろしい場所にあったのです。

原爆投下のあの日、昭和20年（1945年）8月6日には私は広島県立第二中学校の二年生になっていましたが、通常の登校日が急遽<sup>きゅうきょ</sup>勤労作業に振替えられ、現在の広島駅北、当時の東練兵場<sup>\*</sup>への集合を命ぜられました。その練兵場は戦時下で食料が急迫し、なんとさつま芋畠に植え替えられた、その草取りの仕事でした。

畠作業は大嫌いなみんなですから、8時になってもすぐには作業にとりかかりません。おりしも一点の雲もない快晴の空に、かすかに爆音が聞こえ、東方より米軍の爆撃機B29が一機真っ直ぐにこちらをめざして飛んできました。何にでも興味を示したがる中学二年生はたちまち全員立上がり、そのB29機体の方を指しながら口々に何かを叫んでいます。私は太陽がまぶしいので左手を顔にかざしながら目を凝らして機影を追いかけました。B29は単機で高度も相当高いところから、ジュラルミンの真っ白な機体をキラキラと光らせながらこちらめざして飛んできます。我々のいる地点よりだいぶ東寄りの位置まで来たとき、ポロリと黒い棒状のものを機体から離しました。「落した！落した！」皆が口々に叫びます。その物はあたかも鳥の糞<sup>ふん</sup>の落下そっくりで、頭上を越え、西方へすーと放物線を描きながら落ちてゆきたちまち見失ってしまいました。これがあの原子爆弾そのものと知ったのは暫<sup>しばら</sup>く後のことです。

と、B29の方は爆弾を放り出すや否や信じられないくらいの急旋回で北方向に九十度方向転換し遁走<sup>とんそう</sup>を始めました。「曲った！曲った！」の声で、皆は一斉に爆弾の落下方向を眼で追うことを止め、スピードアップしながら逃げる機影を追って首を西から北の方に向けたのです。これが、結果的には良かった。おかげで、閃光<sup>せんこう</sup>のために目が潰れないですんだのですから。

飛行機が進路を北に向けてほんの数秒経ったときか、頭の後ろのあたりがマグネシウムを焚<sup>た</sup>かれたように轟然<sup>ごうぜん</sup>と光ったのです。「アチチチチチ」熱線に焼かれた顔と左手に鋭い痛みを感じました。その瞬間は、側に立っていた友人の頬が太陽の直射下にもかかわらず、桃色の皮膚が紙のように真っ白に見えたのをよく覚えています。これこそ原爆の信じられぬ超閃光の特徴なのです。「千の太陽よりも明るく」という比喩<sup>ひゆ</sup>は正しいのです。

その直後、市中心から地を這<sup>は</sup>うように伝わり襲ってきた爆風で芋畠に打ちつけられて失神してしまいました。数秒なのか？数分なのか？気がつくと畠の畝の間にひれ伏して両手

はっきり両目を覆<sup>おほ</sup>っていました。広島では原爆のことを「ピカドン」と名付けました。最初に光、続いて大きな音が「ドン」と聞こえたからです。然<sup>しか</sup>し私の場合は距離が近すぎて、自分には光は記憶しているがドンの音の記憶はありません。失神から気が付いて頭上を見上げたとき驚きました。すぐ上を巨大な入道雲が覆っています。雲は静止しないでむくむくダイナミックに動き膨<sup>ふく</sup>らみ、その部分々々の色が全部異なります。中心部の雲は原子核反応の余熱が残っているので空気が熱せられて赤い火球状です。(後日1万数千度だったと聞きました)その外の雲部分は暗紫色、更なる外は暗青色、更に外は灰色。中心の火球部はまだ明るいので、取り巻く雲を通して赤さが透けて見えています。それぞれの雲はむくむくとダイナミックに動きつつ色も変化し続けています。その後の絶望的な気分のなかを隣家の友人を捜<sup>う</sup>しだし、二葉山南の尾長町から牛田東<sup>うした</sup>の自宅に通ずる低い峠越へに、牛田早稲田神社隣接の自宅へ帰ることができました。

途中、峠の高度が徐々に高まって行くにつれ広島市中の惨憺<sup>さんたん</sup>たる情景が望見されました。市中あちらこちらから幾条かの黒い煙が薄くすーっと上がり始めています。頭上の原子雲はずいぶん巨大化して、すっかり市全体を覆い尽くしています。特にその天辺の縁の部分は白く輝いているのです。原爆のこの「凄惨<sup>せいさん</sup>なカラー動画」は被爆者しか見たことは無いでしょうね。

早稲田町に着くと近所の藁屋根の農家が炎上中で紅蓮<sup>ぐれん</sup>の炎を上げていました。消す人は見当たりません。あまりにも恐ろしい体験なのでみんな腑抜けになっているのでしょう。自宅に帰ると奇跡的にも両親、五人の兄弟は誰も市中に出なかったので無事であることを知り安心しました。母親は私の顔を見るなり、「まあちゃんおおごとよ！この牛田町に爆弾が落ちたんよ！」と目を見張って言います。私は「お母さん何を言っとるん！爆弾が広島我真ん中に落ちて、今越えてきた峠から見たが、広島じゅうが火事だらけよ。」と答えました。とにかく市民には原爆のスケールがあまりに巨大すぎて想像を超えたのです。自宅はといえば、爆風で母屋の屋根は瓦全体が北側にずり上がっており、縁側をL字形に囲む総ガラスの雨戸はガラスがすべて砕けて柱に突き刺さっている。庭の百年を経た黒松は南西側の葉が熱線のため赤茶色に焦<sup>あぢ</sup>げて縮れています。私は母親から火傷の手当、・・・といっても薬がないのでごま油を塗られ、包帯を顔から背・腕にかけてぐるぐる巻きにされただけでした。

しばらく畳に寝て休み外に出てみました。被爆後幾らか経過した時ですが、市中からは火傷し着衣がボロボロになって垂れ下がったままの市民が続々避難をしてきます。この町は行き止まりの場所なので、多くの人が早稲田神社境内の樹木の下に休む、というより倒れ込んで動かなくなっていました。そしてしきりに「水、水」の音がします。元気な大人が小声で「水をあげてはいけんよ。すぐ死ぬから」と囁<sup>ささや</sup>くのです。でも、やかんの音が聞こえた途端身動きしないでいた人が腕だけをにゅっと延ばし、「みずー」の声を発するのを

聞きましたが、あの瞬間だけは忘れることができません。

翌日以降は当地にて行き倒れて息を引き取った人々を近くの牛田公園にて荼毘<sup>だひ</sup>に付すため、付近の大人が集められて作業に当たることになりました。父も連日奉仕に出かけましたが、帰宅後は「何も言いたくないよ」と言ったまま全く無言。父は亡くなるまでに遂に一回もその作業の状況を説明することはありませんでした。よほどむごい状況だったのでしょう。当時風向きによっては煙と臭いが公園方向から自宅までただよってきて、数ヶ月間はうちでは魚を食べることはしませんでした。あの臭いを思い出すのです。

私は被爆日 8月6日の前日の5日には昔の材木町、今の広島国際会議場のある場所で建物疎開作業をさせられていました。8月6日当日は一学年下の1年生が作業を受け持ったのですが、不運にも300人全員が一人残らず亡くなったのです。この一日の幸・不幸の差は今も心の負い目になって今日に至っています。

それから幾星霜<sup>いくせいそう</sup>。東京にずっと暮らしていた自分は、たまたま帰郷して平和公園を訪れたとき、全く偶然に広島二中の原爆慰霊碑を見つけました。碑の裏に廻って、懐かしい先生方のお名前と級友Y君の名前、それからいつも牛田町から一緒に通学した一年生M君の名前を見つけたとき、ボロボロボロと両眼から涙が噴き出して止らなかったのです。今でも慰霊碑を囲み水を湛<sup>たた</sup>えたあの池を見るたびに「みずー」のあの声が必ず耳元に蘇<sup>よみがえ</sup>るのです。

(付記)

自分は原爆のことについては長年文章に書いたことはなかった。それは思い出したくないし、触れたくもないという潜在意識が絶えず働いている故でしょう。

私は原爆の出てくる映画は見ない、原爆に関する本も読まないことにしていました。唯一読んだ記憶があるのは、昭和三十年代の出版でしょうか、ロベルト・ユンクというドイツのジャーナリストの書いた「千の太陽よりも明るく」という原爆の開発と使用のいきさつを書いた書物です。これでマンハッタン計画<sup>\*</sup>というものの存在を知りました。今も私にとってはこの本一冊で十分であると思っています。

こんな私も被爆後10年以上経過した後は変化してきました。即ち原爆についての体験を知人・友人・そして若い人に求められるままに体験談として、意見も含めて努めて語るように心がけるようになりました。歳を取るに付けてますますこの傾向が激しくなってきたように思われます。それは「戦争の惨禍は体験しない時代の人に伝えて、戦争の恐ろしさを伝えるのが体験者の責務である」という風に変わってきたのです。広島市に在住したのは2007年までですが、70歳を過ぎてからは市の依頼で「原爆語り部」を務めるように超変化しました。

私が語り部を務めるとき、最後に申し上げていた言葉は  
「戦争に『正義の戦争』というものは存在しない」でした。

## 【 用語説明 】

50音順

- 赤紙** ……在郷軍人や国民兵などを召集する命令文書のこと。旧日本軍の召集令状には赤い紙を使用したので、俗に赤紙といった。
- 赤チン** ……正式には、「赤ヨードチンキ」または「マーキュロクロム液」という。外傷部用の消毒液のことで、液が濃い赤色をしていたことから、通称「赤チン」と呼んだ。1973年頃、製造過程で水銀が発生するという理由で製造が中止された。
- 掩体壕（えんたいごう）** ……航空機を敵の攻撃から守るための格納庫。通常はコンクリート製で、かまぼこ型をし、中に航空機を収納するが、簡易なものは屋根がなく土を盛っただけのものもあった。
- 王道楽土** ……満州国建国の際の理念。王道によって治められる、平和で楽しい土地。アジア的理想国家（楽土）を西洋の武による統治ではなく、東洋の徳による統治（王道）で造るという意。
- 学徒出陣** ……学徒出陣は、第2次世界大戦終盤の兵力不足を補うため、高等教育機関に在籍する20歳以上の文科系学生を徴兵し、出征させたこと。
- 学徒動員** ……第2次世界大戦中に、中等学校以上の生徒や学生が軍需産業や食糧増産に動員されたこと。
- 学校報国隊** ……ももとは、旧制中学校、高等女学校、大学などで組織された校友会のことで、太平洋戦争開戦前に学校報国隊に改組、改称された。
- 関東軍** ……大日本帝国陸軍の総軍の一つ。名前は警備地が中華民国関東州であったことに由来する。
- 紀元節** ……紀元節は、神武天皇が即位した日を日本の建国の日として祝う日のこと。2月11日として定められ、現在は「建国記念日」と改正されている。
- 旧制中学** ……旧制中等教育学校のことで、戦前、高等教育機関への進学を主目的にした、男子のみの中等教育機関のこと。
- 教育勅語** ……正式名称は、「教育ニ関スル勅語」。1890年に発布された。第2次世界大戦以前の日本の教育の根幹となった勅語。
- 玉音放送** ……1945年8月15日正午に、天皇陛下が終戦の詔書を読んだラジオ放送のこと。
- ゲートル** ……脚部・すねを保護するため、ズボンの裾をテープ状に巻き付ける長い布や革のこと。脚絆ともいう。
- 高射砲** ……敵戦闘機を撃墜するために地上に設けられた砲のこと。
- 高等女学校** ……戦前の旧制中等教育学校の一つで、女子に必要な高等普通教育を行った。高女ともいう。
- 国防婦人会** ……1932年に誕生した日本の婦人団体で、白エプロン、白たすきの会服で、出征兵士の送迎や慰問袋の作成などを行った。
- 国民学校** ……国民学校は、日中戦争後設けられ、初等教育と前期中等教育を行っていた学校のこと。
- 国民服** ……第2次世界大戦中、広く男子が着用した軍服に似た衣服。



- 御真影** ……高貴な人の肖像画や写真を敬つていう言葉。日本では特に天皇・皇后両陛下の公式の肖像写真のことをいう。
- 御前会議** ……大日本帝国憲法下の日本において、天皇陛下臨席のもと、重要な国策を決めた会議のこと。
- 五族協和** ……満州国建国の際の理念。五族とは、大和族、漢族、満州族、朝鮮族、蒙古族を指し、五民族が協調して暮らせる国を目指すという意。
- 国家総動員** ……戦争遂行のため、国家の全ての人的・物的資源を政府が統制運用できるようにすること。
- サーベル** ……軍用の刀のこと。日本では、戦前、軍隊や警察で用いられた。
- 三国同盟** ……1940年9月27日に締結された日独伊三国間条約に基づく、日本、ドイツ、イタリア間の地位の相互確認、戦線の相互援助などの同盟関係。
- 産婆** ……妊娠や助産行為を行う者のことで、戦前は「産婆」、「産婆さん」と呼んでいた。現在、正式名称は「助産師」である。
- サンフランシスコ平和条約** ……日本と連合国諸国との間で1951年9月8日に調印・締結された条約。サンフランシスコで締結された。この条約は翌年4月28日に発効し、日本の占領が終り、主権が回復された。
- 支那事変** ……1937年7月7日の盧溝橋事件に端を発した日本と中華民国との間で行われた長期にわたる戦闘。現在は、太平洋戦争（大東亜戦争）勃発後も含め日中戦争ともいう。  
「支那」とは、現在の中国または、その一部の地域に対して用いられた地理的呼称、あるいは通史的な呼称。しかし侮蔑的だとの説もあり、戦後は「中国」と呼称。
- 焼夷弾** ……家屋物資の焼き払いや火災による人員殺傷を目的とした中に焼夷剤が入った爆弾のこと。
- 少国民** ……第2次世界大戦中、年少の少年少女を指していった言葉。現在では死語となっている。
- 召集令状** ……在郷軍人や国民兵などを召集する命令文書のこと。
- 詔勅** ……日本国憲法施行以前に、天皇陛下が公務で行った意思表示をいう。
- 女子挺身隊** ……戦時中、日本の労働力がひっ迫する中で、国家総動員体制を補完するため創設された14歳以上25歳以下の女性の勤労奉仕団体のこと。
- 進駐軍** ……終戦後、ポツダム宣言の執行のために、日本において占領政策を実施した連合国軍の俗称。GHQ（連合国軍最高司令官総司令部）や進駐軍と呼ばれた。
- すいとん** ……小麦粉を水で練り、手で千切ったり丸めたりしたものを、汁で煮込んだ料理。戦時中や終戦直後の食糧不足の時の代用食として主に食された。
- 接収** ……国などの権力機関が、個人の所有物を強制的に取り上げること。
- 千人針** ……晒木綿（さらしもめん）に千人の女性が赤糸で一針ずつ縫って千個の結び目を作り、出征兵士の腹巻にし、戦場での幸運や兵士の生還を祈る一種のお守り。
- 造兵廠** ……旧陸軍・海軍で、武器・弾薬その他の軍需品の研究・製造・修理などを行った工場、機関のこと。

- 疎開** ……もともとは軍事用語だったが、第二次世界大戦末期には、都市に住む学童、老人、女性などを戦火から避難させ、郊外の農山村などに移動させることをいう。中でも主に学童疎開を意味することが多く、親戚宅などに避難する縁故疎開、親戚など頼るところがない場合は学校毎に、お寺などに集団で疎開する集団疎開があった。
- 大東亜戦争** ……戦前の日本と、アメリカ、イギリス、オランダ、ソ連、中国などの連合国との間に発生した戦争の呼称。
- 第二次上海事変** ……1937年8月13日から始まる中華民国軍の上海への進駐と、それに続く日本軍との交戦。1932年1月28日に起きた第一次上海事変に対してこう呼ぶ。
- 大本営** ……日清戦争から太平洋戦争までの戦時中に設置された日本軍の最高統帥機関。
- 中国残留孤児** ……第2次世界大戦末期、ソ連軍の侵攻と関東軍の撤退により両親の死亡、また生き別れなどにより、日本に帰国できず、中国大陸に残留した子どものことをいう。
- 徴兵検査** ……一定の年齢に達した男子に対して身体検査を行い、合格した者を徴兵対象の候補者とするための検査。
- 徴用** ……戦時中などに、国家が国民を強制的に動員して兵役以外の一般の業務につかせること。
- 対馬丸事件** ……1944年8月22日、沖縄から本土に疎開する学童など1,788人を乗せた学童疎開船「対馬丸」が、鹿児島県沖でアメリカ潜水艦の魚雷攻撃を受け、沈没。779人の学童を含む1,476人が犠牲になった。
- 逋信省** ……かつて日本に存在した郵便や通信を管轄する中央官庁の名称。
- 隣組** ……昭和期に、戦時体制の銃後を守るための、国民生活の基盤の一つとなった官主導の隣保組織。5軒から10軒を一組とし、住民間の団結や戦争への協力、思想統制などの役割も担っていた。
- 日支事変** ……日中戦争のこと。
- 日ソ中立条約** ……1941年に日本とソビエト連邦（ソ連）との間で締結された中立条約。相互不可侵及び一方が第三国の軍事行動の対象になった場合の他方の中立などを定めた中立条約。
- 日中戦争** ……1937年から1945年まで、日本と中華民国との間で行われた戦争。この戦争の発端となったのは盧溝橋事件で、当時は支那事変と呼ばれたが、1941年12月のアメリカ、イギリス等との太平洋戦争勃発に伴い大東亜戦争と呼称した。
- 白系ロシア人** ……ロシア革命後、ロシア国外に脱出あるいは亡命したロシア人のこと。
- 八路軍（はちろぐん）** ……日中戦争時に、中国華北方面で活動した中国共産党軍（中国国民革命軍第八路軍）のこと。一般に、「はちろぐん」と読むが、「パーロぐん」ともいう。
- 馬力（ばりき）** ……荷物を積んで運ぶ馬車のこと。
- 米穀通帳** ……戦時中の米不足から、食糧管理法の下で各世帯が米の配給を受けるために配付された通帳。

- 兵站（へいたん）** ……戦闘地帯から後方の軍隊の諸活動・機関・諸施設を総称したもので、戦争において作戦を行う部隊の移動と支援を計画し、実践する活動を指す用語でもある。
- 奉安殿** ……戦前の日本の学校において、天皇皇后両陛下の写真（御真影）と教育勅語を納めていた建物。
- 防空頭巾** ……太平洋戦争末期、空襲の際の落下物から頭部を守るために、頭から首や肩にかけて被る綿や木綿でできた頭巾のこと。
- ポツダム宣言** ……1945年7月26日に、ドイツ・ベルリン郊外のポツダムで発表された。日本の無条件降伏等を求めた、アメリカ・イギリス・中国の3ヶ国首脳による宣言。
- 満州事変** ……1931年9月18日に満州奉天郊外の柳条湖で、南満州鉄道の線路が爆破された事件（柳条湖事件）に端を発した日本と中華民国間の武力紛争。
- マンハッタン計画** ……第2次世界大戦中にアメリカによって行われた原爆製造計画のこと。計画の名は、当初の本部がニューヨーク・マンハッタンに置かれていたことによる。
- 予科練** ……海軍飛行予科練習生の略称で、戦前の海軍の航空兵養成制度の一つ。志願、養成経過等により甲種飛行予科練習生、乙種飛行予科練習生、丙種飛行予科練習生が設けられた。
- 抑留者** ……終戦後武装解除、投降し、捕虜となった日本軍兵士らが、ソ連によって主にシベリアなどに労働力として移送隔離され、長期にわたり抑留、強制労働に従事させられた日本人のこと。厳寒の地で、また劣悪な環境下での過酷な労働により多くの抑留者が死亡した。
- 柳条湖事件（りゅうじょうこじけん）** ……1931年9月18日、満州の奉天北部の柳条湖付近で、日本の所有する南満州鉄道の線路が爆破された事件。
- 練兵場** ……兵隊を訓練する場所のこと。
- 盧溝橋事件（ろこうきょうじけん）** ……1937年7月7日に北京近郊の盧溝橋付近で起きた日本軍と中国国民革命軍との間で起きた衝突事件。この事件はその後の日中戦争の発端となった。

〔 以上 〕

## 【 宝塚市の戦争の記録 】

### 《 宝塚海軍航空隊 》

第2次世界大戦中、宝塚市内には、宝塚ファミリーランド（当時の宝塚新温泉）に、海軍の施設として「宝塚海軍航空隊」が置かれていた。

戦況が厳しくなる中、少年兵の基礎訓練の場として海軍が阪急電鉄から宝塚歌劇団の施設を接收。昭和19（1944）年8月15日、滋賀海軍航空隊の宝塚分遣隊が開隊。同月25日、海軍飛行予科練習生（予科練）の第13期操縦専修隊1,000人が奈良分遣隊から移動してきた。その後、第14期生や第15期生の移動が続いた。

翌20年3月1日、宝塚分遣隊は宝塚海軍航空隊と改称。4月から8月にかけて第16期飛行予科練習生が数次に分かれて入隊。この間、常時3,500人から4,000人近い海軍将兵が宝塚大劇場や周辺諸施設を利用して生活していた。



遊園地のプールを利用した水泳訓練



第2練兵場（現・旭町1、2・鶴の荘）



第3練兵場（逆瀬川駅背後の民間の運動場、現・社町）



第4練兵場（逆瀬川上流のゴルフ場  
現・宝塚ゴルフ倶楽部）

### 《 戦争の傷跡 》

#### 空襲による被害

宝塚市域で直接爆撃の対象となり空襲を受けたのは、昭和20（1945）年7月24日の川西航空機株式会社宝塚製作所であった。



それ以外にも、宝塚海軍航空隊があった宝塚新温泉に対する米軍の艦載機による機銃掃射や、市内各所で、(飛行機から)見かけた村民に対する機銃掃射があった。(ことが記録として残されている)。また、市内各所で、阪神間の各所を爆撃した後の残りの焼夷弾や爆弾が落とされた。

当時、川西航空機株式会社宝塚製作所等には、宝塚歌劇団をはじめ、小林聖心女子学院、神戸女学院、関西学院、伊丹中学などの生徒が勤労働員、学徒動員されていた。

川西航空機宝塚製作所の爆撃(昭和20(1945)年7月24日)

昭和20(1945)年になると、敗色も濃くなり、神戸阪神間の工場や市街地は米軍の爆撃機による空襲を受けた。そして米軍は、海軍軍用飛行機を製造していた川西航空機株式会社宝塚製作所に目を向け、同年7月24日午前10時30分頃、B29と小型機合わせて約150機による20~40機の編隊で同製作所に対して数回に及ぶ波状攻撃を行った。

この空襲は会社の航空機生産に決定的な打撃を与えた。また、犠牲者も遺骨の数は約120。川西航空機の報告では、死者83となっているが、それ以外の40人近くの犠牲者は、動員学生か女子挺身隊員、または軍人であったと推測される。しかもその中には、鹿塩、東蔵人の犠牲者は含まれていない。同7月27日の良元村の調査では、村民の死者は23人にのぼっている。なお、同製作所は24日以外にも、6月15日に爆撃されている。

(宝塚市大事典ほかから抜粋)



被爆した川西航空機株式会社宝塚製作所



東洋ベアリング宝塚歌劇団生徒女子挺身隊



小林聖心女子学院女子挺身隊

## 【 宝塚市平和関連施策の主な取組経過 】

年 月 日	施 策 内 容
昭和61年7月	第1回「平和」みる・きく・伝える展 開催
平成1年3月7日	「非核平和都市宣言」 実施
平成4年3月	平和啓発冊子「いま、語りつぐ平和への願い」 発行
平成6年3月	平和啓発冊子「いま、語りつぐ平和への願い II」 発行
平成6年8月4日	平和モニュメント「火の鳥」像 建設
平成7年3月31日	平和基金 設置
平成9年7月	平和啓発冊子「いま、語りつぐ平和への願い III」 発行
平成10年7月	平和啓発冊子「いま、語りつぐ平和への願い IV」 発行
平成11年7月	平和啓発冊子「いま、語りつぐ平和への願い V」 発行
平成15年9月19日	「核兵器廃絶平和推進基本条例」 施行
平成18年7月	平和啓発冊子「いま、語りつぐ平和への願い VI」 発行
平成21年7月1日	平和市長会議 加盟
平成21年8月8日・9日	平和市長会議第7回総会 出席
平成21年9月4日	「ヒロシマ・ナガサキ議定書」 賛同署名
平成21年11月1日	日本非核宣言自治体協議会 加盟
平成22年7月27日	2020核廃絶広島会議 出席
平成22年10月30日	被爆アオギリ二世記念植樹・平和特別講演（講演者：秋葉忠利広島市長）
平成23年1月27日	「北東アジア非核兵器地帯を求める国際署名」 賛同署名
平成23年4月16日	「平和祈念ベンチ」 設置
平成23年10月	平和啓発冊子「いま、語りつぐ平和への願い VII」 発行
平成24年1月14日	平和市長会議第1回国内加盟都市会議 出席
平成24年11月3日	被爆クスノキ二世記念植樹・平和特別講演（講演者：田上富久長崎市長）
平成24年12月	平和啓発冊子「いま、語りつぐ平和への願い VIII」 発行
平成25年8月4日・5日	平和市長会議第8回総会 出席
平成26年3月	平和啓発冊子「いま、語りつぐ平和への願い IX」 発行
平成26年8月15日	「平和の鐘」及び「非核平和都市宣言文石碑」 設置
平成26年12月14日	平和特別講演（講演者：大田昌秀元沖縄県知事）
平成27年3月	平和啓発冊子「いま、語りつぐ平和への願い 特集号（X）」 「市民による戦争体験記録集」 発行

※ 上記の他、毎年、平和映画会、平和アニメ映画会、平和を願う市民のつどい、平和パネル展、平和を考える市内史跡・戦跡めぐり、「平和」みる・きく・伝える展 などの施策を実施しています。



## 【 編集委員編集後記 】

50音順

- 戦後70年目に、平和を願って、「市民による戦争体験記録集」を発行出来ましたこと、感謝で一杯です。この地球上から核のない世界が訪れますように。そして平和の尊さを訴え続けてまいります。  
(岡邊 好子)
  
- 私は、宝塚市平和事業検討委員会の委員となり、平和の大切さのことをよく考えるようになりました。今後も平和事業に少しでも関わってまいりたいと思います。  
(加藤 優子)
  
- 『戦争のない平和な日本』が当たり前になった今、この手記を読ませていただき、多くの方々の苦しみや悲しみを真摯に受け止め、戦争を知らない私たちも次の世代へ『平和のバトン』を引き継いでいきたいと思います。  
(坂野 はるみ)
  
- 私は戦後生まれですが、親が中国からの引揚者で、戦中、戦後の苦労を日頃聞きながら育ちました。また宝塚に嫁いで来てもお姑さんに宝塚も大変だった事を折に触れ聞きました。今回の皆さんの、体験記録を読ませていただき、改めて、風化させるのではなく語りついで、“すべての人々が平和で明るく過ごせる社会でなければいけない”と実感しました。  
(田中 美佐子)
  
- 原爆被爆体験、大陸引き揚げ家族など戦争体験の思いを涙して読ませていただきました。私も広島市出身で父や従兄弟が被爆しました。小学校三年生の私は疎開先に居ました。戦争は人の心の中で生まれます。相手の心や事情を知り、自分の気持ちも伝えれば人と人の間でも、国と国の間でも戦争は起きないでしょう。  
(土井 浩)
  
- 戦況の悪くなる中で、開聞岳の上を通過して沖縄に向かった戦友の面影が忘れられず、思い出すたびにむなしい気分になります。  
(橋本 欽吾)
  
- 市民の皆さんから寄せられた貴重な体験を一人でも多くの方々にお読みいただき、次世代の子どもたちに、平和の大切さや戦争の悲惨さを語り継ぎ、ともに学ぶ機会や場を多く持つようにしたい。  
(福井 明)
  
- 今回、多くの方々の戦争の貴重な体験を書かれた文章を通して、改めて想像できない程の悲惨な事実を知ることができました。宝塚市が取り組んでいるこの事業に関わらせて頂き、平和を守る為には、語り伝える、その事の意味を重く受け止め、しっかりと次世代の人々に伝えようと思います。  
(吉田 光子)
  
- 貴重な原稿総てに目を通させて頂き、当時の事が鮮明に思い出され、悲しさ一杯でした。戦争は絶対に駄目、平和の永続を願います。  
(渡邊 圭造)

※「市民による戦争体験記録集」の編集は、上記宝塚市平和事業検討委員会委員の皆様で担当していただきました。



## 非核平和都市宣言

青くすみきった空、清らかな武庫川の流れ、緑あふれる六甲・長尾の山々……。この素晴らしい自然と明るくおだやかな暮らしは宝塚市民すべての願いです。

このような私たちの願いに反し、世界では依然として、人類同士の悲しむべき争いが絶えず、しかも地球上の全生命を滅ぼすことのできる核兵器が蓄積されてきました。

しかし、人類の平和への切実な願いが全世界に高まり、大きなうねりとなって、ようやく戦略核兵器の縮小や、各地域の紛争解決への明るい兆しが見えようとしています。

私たちは、このようなときにこそ、戦争を、そして核兵器をなくし、世界の恒久平和を強く願わずにはられません。

ここに、宝塚市は憲法の平和精神に基づき、恐るべき核兵器の廃絶を願い、永遠の平和社会を築くことを誓い、「非核平和都市」とすることを宣言します。

平成元年（1989年）3月7日

宝 塚 市



平和モニュメント「火の鳥」像  
(手塚治虫記念館前)



被爆アオギリ二世  
(末広中央公園)



被爆クスノキ二世  
(末広中央公園)

～非核平和都市宣言 25 周年記念～  
いま、語りつぐ 平和への願い 特集号 (X)  
「市民による戦争体験記録集」  
平成 27 年 (2015 年) 3 月発行  
発行・宝塚市総務部人権平和室人権男女共同参画課  
編集協力・宝塚市平和事業検討委員会  
宝塚市東洋町 1-1 電話 0797-71-1141 (代表)